
微瞑むように 【第一話 聖女と最後の料理長】

ブシィ=ナスカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微瞑むように 【第一話 聖女と最後の料理長】

【Nコード】

N1749B

【作者名】

ブシィⅡナスカ

【あらすじ】

「この世界の裏側には、冥界があるんだよ。不思議な力を持った冥人達の幽玄の世界さ」ボケたばあちゃんの世迷い言だとばかり思ってたけど、なんか本当らしい。ついでに、決して交わる事の無い二つの世界の番人らしい。……村一番の、あの馬鹿が。

青年は白い前掛けで手を拭くと、顔を上げて相手を見た。老人の顔には深い溪谷が走り、水晶の瞳が物悲しげに自分をまっすぐ見つめて、その用件が青年にとって悪しきものだということを暗に告げていた。

青年は小さく首を振って、厨房を出る。

擦れ違い際に彼が老人の細い肩に触れ、背筋を伸ばして廊下の果てへと消えると、残された老人は肩を落とし、厨房の入り口で悲壮に目頭を抑えた。

石造りの廊下から木造の、そして絢爛な絨毯へと変化する足元を視界の端で捕らえながら、青年は数を数えた。百五十まで数えた時、目的の広間へと踏み入った。

正面の大仰な玉座に座る肥えた男を見据え、一礼する。

「お呼びでしょうか、旦那様」

男は頷くと、酒と煙草で傷んだ声で応えた。

「お前の腕は世界で一番だ。また、アレが食べたい」

「……失礼ですが、旦那様。これ以上はなりません。王都の裁判所が訝っています。そして料理人達も恐れて辞めたがつています」

「お前を筆頭にか？ カイム」

青年は嘆息すると、目を伏せた。

いいえ、と呟くと、男は大きな口を頬まで裂いて金色の歯を剥いて笑った。

「私はここを辞めません。旦那様がアレを望まれる限り」

「忠義者よ、智者よ、嬉しいぞ。お前もお前の腕が一番奮える料理が何かを知っているのだな。なら恐れるな。私の為に調理しろ」

青年はもう首を縦にも横にも振らなかった。

これは決定事項なのだ。男が既に決めた事なので、その意思を曲げることは不可能である。男も相手が観念したことを知ると、益々

笑みを深くする。

そして椅子の背に身体を預け、一際大きな声で直立する料理人に告げた。

「ガリの聖女だ。私は彼女が欲しい」

微瞑むように

第1話 聖女と最後の料理長

キリアは短く刈った髪を撫でた。もう朝から十数回は撫でている。しかし収穫後の秋の稲のようなそれは、色だけでなく短さまでもそれに似通い、いくら手櫛を通したって意味など無かった。それでもキリアは撫でる。それは男の嗜みだからだ。

水色の甘いジュースを飲みながら、少年は店内を見回した。昼も過ぎたこの酒場には、普段は殆ど人がいない。今日はどうやら例外のようだった。

「ねえパパ、この村って何か楽しいところがあるの？ あたし、退屈しちゃった」

「我慢しなさい、ミミ。ここは母さんの両親の実家だからね、婿養子の父さんはこうやって時々挨拶に来ないと面目ってもんが立たないんだよ。それに、父さんが頭を下げれば下げるほど、母さんが帰ってきてくれる確率も上がるものなのさ」

「ふうん、大変なのね」

キリアは見慣れないその父娘の座るテーブルを横目で見ながら、さも無関心を装ってちびちびとジュースを飲み続ける。

そうか、ミミという名前なのか。

その少女は栗色の髪をくるくると巻いて、頭の後ろの方で一つに束ねている。桃色の大きなリボンが栗色にとても映えていたし、白いワンピースはこの村のどこを探したって発掘出来ないようなお洒

落な代物だった。大きな瞳は眠そうに半分閉じていて、ふつくらとした唇は不平に曲がっている。

生意気そうな顔がまた可愛らしい。青い顔に力ない笑みを口元に浮かべている父親が隣にいるものだから、その健康的なはずらつとした様子が嫌でも際立っていた。

しかしキリアは決して興味のある素振りを見せないように努力した。それは硬派な男の嗜みだからだ。

「ねえパパ、そういえばガリの聖女って知ってる？ この間読んだパンフレットの隅っこに載ってたの」

ぴくり、とキリアの耳が動く。

「ガリ？ なんだいそれは。この村の名物なの？ 食べ物？」

「知らない。この村にはガリの聖女がいるって書いてあっただけ」
キリアの口元がぴくぴくと小さく動き始めた。

遙か遠くで、寺院の鐘が韻を引く美しい音を奏で始めた。キリアはその音に違和感を感じたが、すぐに無視した。早朝、正午、夕刻にしか鳴らないはずの鐘が昼下がりに響いている事など、大した問題ではない。この洒落た異邦人の前には。

彼女の言うとおり、それはこの村の名物なのだ。かなりマイナーなものなので、世間では余り喧伝されていない。詳しく知らないのも無理は無いだろう。村人ならば全員、嫌でも知っている。当然、キリアもまた。

二人はまだその聞き慣れない言葉について討論をしている。

口を挟もうか、挟むまいか、延々と懊悩しているうちにジューズはついに全て胃の中に納まった。

（教えよう、よし、話しかけるぞ。おれは男だ、言うぞコラ！）

そしてあの子と友達になるのだ！

だん、と机にコップを置く。二人がこちらに気を引かれたのが気配で判る。

いざ、と口を開きかけた、次の瞬間。

静かに鳴っていた寺院の鐘の音が歪な響きを持ち——カン、カン

カ、ガガガガン、ガガン、ゴ、と鳴った後、ほんの少しの間を置いてドズーンと重い地響きをもたらした。その後はただ、不気味な静寂が落ちる。犬の鳴き声すら止まった。

「パパ、今の何？」

「さ、さあ……」

出鼻を挫かれたキリアは溜息をつく、重い腰を上げて出口に向かう。蘊蓄を披露する気は全く失せてしまった。何故なら――。

仰天している二人を振り返ると、「ガリの聖女だよ」と言っただけから外に出た。

ミミと視線がぶつかったので、相当心臓が驚いた。

寺院の下には一人の人間が寺院の天辺を睨んで肩を怒らせている。村人たちも慣れたのか、十人は集まっていた当初よりは随分と減ったものだ。

「こらー！ あんた何度鐘落としたら気が済むねー！ 割れても買い変えてやらないよー！ ていうかそこまで持つて行くの重いねー！ ていうかなんで今鐘を鳴らしてるのよー！」

ちよび髭のファイがお玉を片手に顔を真っ赤にして空に向かって怒鳴っている。彼は外つ国の出身なので、言葉に妙なアクセントがある。彼が怒ると皆が思わず吹き出し、益々彼は怒るのである。

キリアは無様に地面に転がる歪んだ鐘を見つめた後、その無くなつた尖塔を見上げた。

本来、釣鐘状の黒い影が青空に映えているはずの場所はぽっかりと青い穴が空き、清々しいまでに風通しが良い。そこには人影は無い。

ファイがちよび髭をひっぱりながらお玉を振り回した。

「いない振りしても駄目よ！ おっきいお尻が見えてるよ！」

瞬間、尖塔のへりに隠れていた人物が勢い良く立ち上がった。

「おつきくありませんッ！！ この頃流行りのお尻の小さなチャ―

ムな女の子といえば私のことです！」

そう怒鳴ってから、相手はたと口を嚙んだ。ファイがニヤリと口元を歪める。

馬鹿、とキリアは溜息をついて腕を組んだ。

「ちよっと、降りてくるね。村内会会計役として一言言わせて貰うよ」

少女は暫くファイを見下ろしていた様だったが、やがて肩を落として降参の合図を見せる。そしてへりに両手を着き、半分身を乗り出して屋根に足を着けた。

「馬鹿ツ、階段を使つて降りるね！」

あ、そうか、という呟き声が微かに聞こえた。

少女が今度こそ尖塔から姿を消したのを確認すると、ファイはキリアに「馬鹿ね」と言う。その言葉が余りにも的確だったので、キリアは「馬鹿だね」と迎合しておいた。

ややあつて、寺院の扉から出てきたのは黄緑色の服を着た少女だった。

右手に木の槌、左手に服と同じ色のヴェールを握って、これからやってくる怒声に怯えている様子は傍目にも明らかだった。沈黙しながら睨みつけるファイに愛想笑いを浮かべると、スカートの端を掴む。

「今日のテーマは森を全力で駆け巡る妖精の残像です」

「何が妖精ね、この妖怪光合成！ ヴェールは被らない、派手な色の聖服は着る、あまつさえ半年で三回も鐘を落とす！ あんた、馬鹿？ 馬鹿ね？ あんたが馬鹿じゃなかったらわたし天才ね！」

「え、も、もしかして墓の上で元気に咲く花の方がお好みでしたか？ それとも日溜りで眠る猫の毛玉？」

「ええい、なんつつう良く考えたら気色の悪い発想か！ そこに正座しる、正座！」

「はい……。あ、あの、でもヴェールは蒸れてハゲになるから嫌なんです。ファイさんはもうその心配はしなくて良いと思いますけ

ど……」

キリアは思わず吹き出しそうになるのを堪えた。

ファイは薄くなった頭の天辺まで真っ赤にし、隣の少年を睨みつける。その睥睨に込められた殺意を読み取ると、慌てて目を逸らして歪な鐘へと焦点を合わせた。

自称妖精の服を着た少女は律儀に地面に正座し、ファイの怒りは気づいていない。気落ちした表情で木槌を弄り、地面に生えている草を力なく叩き始める。彼女はわざと彼の怒りを買おうとしているのではない。何があるうとも、それだけは事実だということは村中みんな知っている。

これは彼女の天性の才能なのだ。

ファイは震える拳をどうにか抑えると、大きく大きく溜息を吐いた。そして鐘の傍へしゃがみこむ。鐘は、子供の肩から指先までの大きさがあり、大人二人でやっと運べる程の重さだった。

彼はチョビ髭を一撫でしてから、鐘に手をかける。

「もういいね、疲れるから……。わたし、あんたに寿命の半分持つてかれてる気がするよ。ほら、さっさとそっち持つて。それにしたって、なんで落とすかねえ、しかも昼下がりに」

少女は木槌を草にずりずりと擦り付けながら答える。

「人参と赤ランサのワイン風味スープが我ながら美味しくて、お腹いっぱいになった私は鐘楼でぼんやりしてたんです。春の暖かい風が気持ち良い午後でした。その時、草原の街道をこちらに向かってくる綺麗な毛並みの狼を遥か遠くに見つけ、不思議におも」

「簡潔に」

冷ややかに合いの手を入れられ、ガリーナは一瞬だけ口を噤んで木槌を草に擦り付ける動作を止めた。しかしすぐに両方の動作を再開する。

「つまり、叩きすぎちゃいまして。不倶戴天の敵を見つけてしまっ
て思わずムキに」

「不倶戴天？」

初めてキリアが口を開く。

少女は少年を見上げると、力強く頷いた。

「ええ、あの黒い悪童です。からくも私の十連撃を逃れた奴は、まだ生きています。この村のどこかで」

「どこかつつか、鐘にだろ」

次の瞬間、恐ろしい絶叫が青空に木霊した。

鐘に抱きついてたファイの袖口から、影に隠れていたゴキブリが侵入したのだ。

——それから先のことは、まさに阿鼻叫喚の縮図だった。

結局、少女は頭に二つのたんこぶをファイからプレゼントされ、泣く泣く妖精のヴェールを被って命じられた半刻の正座に甘んじる。鐘は、上半身裸になって肩を怒らせながら帰るファイの後姿を放置されたまま見送った。

キリアは罰当たりにもその上に座って、律儀に正座して涙する少女を見つめる。

「キリア、私が悪いんでしょうか」

「お前というより、お前の頭がじゃなかるうか」

はあ、と少女は溜息をつく。

キリアは今年十一歳になるので、六歳ほど年上のこの少女は十七のはずだった。しかし、彼は何時だってこの娘を年上と尊敬した事はない。同年代かそれ以下の女子としか見られないのだ。

従って、キリアと彼女はとてもいい——かどうかは分からないが

——友人同士なのである。

「ところで、宿題はやっただんですか？ 遊ぶのもいいけど、ちゃんと勉強しないと駄目ですよ」

彼女の方は、いつもキリアの事を子供扱いするのだが。

その時、例の父娘が寺院の前までやって来た。

キリアは慌てて鐘から立ち上がり、そちらの方を見遣る。少女は

興味無さそうにしょげ込んだまま、再び木槌で草を叩き始めた。

二人は、落ちた鐘と正座したまま草を叩き続ける修道女らしい派手な色の服を着た少女を交互に見て、困惑したように顔を見合わせた。

「ねえ、あなた、さっき言ってたわよね」

ミミが首を傾げながらキリアに問うと、彼は急ぎ足になり出した心臓を抑えるように口をへの字に曲げて頷く。

「ガリの聖女って、どこにいるの？」

「ガリじゃありません」

少女がごりごりと草を摺りながら言った。

青臭い匂いが辺りに充満する。

「ガリじゃなくてガリーナです。私は、聖女ガリーナ」

二人が僅かに眉を潜めたのは、草の匂いの所為か、それとも彼女の言葉の所為か、或いは大地を疾走する黒い悪童を見つけた所為なのかは傍目には解らなかった。

+

「まあ、聖女つつつても王都の教会からは非公認扱いされてるんだけどね。寧ろ異教徒とか言われてるんだ。いわゆる田舎の胡散臭い自称聖人ってやつだよ。いるだろ、世界を救う神の子供とか世界を洗う神の家事手伝いとか、王都にも」

饒舌に話すキリアの話を、ミミは楽しそうに聞いている。ガリーナは恨みがましい目で少年を一瞥するが、確かに彼の言葉は理に敵っていたので結局黙り込んでいた。

半刻の正座で痛めつけられた足を撫でながら、人が集まり始めた酒場の賑わいを眺める。耳はしっかりと子供たちの会話の為に大きくしたままに。

「じゃあ、もしかして冥魔術とか使えるの？ 異教徒なんでしょう？ あら、それは邪教だったかな。あんまり詳しくないんだけど」

「まさか！ そんな器用な真似は出来ないよ、ガリに」

「ガリーナ」

キリアは横槍を無視して得意げに話し続けた。ミミと友達になれた事が存外嬉しく、舞い上がっているのである。

「実は、おれの方がちよつと使えるんだよな、冥魔術」

「えーっ、本当？　すごいすごい！　使って見せてよ！」

ミミは目を輝かせて体を乗り出した。彼女の父親は、母親の実家で土下座——挨拶をしに行っているとかで、キリアに彼女の世話を一任して、この場には居ない。つまり、ここはキリアの独壇場なのだ。

「駄目だよ、人がいないところじゃなきゃ怪我するし。それに、ガリもいるし」

「ガリーナ」

「いつか強い魔術も使えるようになって、冥獣も召喚出来るような魔術師になりたいんだ」

ついにガリーナが怒ったように声を上げた。

平手でテーブルを叩き、ぺちんという些か情けない音を出した後、その手を一直線に上空へと突き上げる。

「駄目です、キリア。冥界の術を使っちゃいけないって何度言ったら解るんですか私が何のためにいるか考えたことあるんですか？

つまらない事してないで少年らしくカマキリのお腹の中のハリガネムシでも採集してなさい！　おばさん枝豆！　あとライムジュース！」

面倒臭そうにキリアがガリーナに顔を向けた。対抗するように同じく片手を天井に向けて指し上げながら。

「いや、だってお前のそれは趣味だろ？　聖女とか言ってもなーんも役に立ってねえじゃん、実際。あ、鐘落つこととしてファイさんを筋肉痛にしているか、偉いよおれにはとても出来ない。ぶつ芋揚げモソース添え！」

「な、な、なんと無礼な！　千年続く聖女の歴史をたかだか十年し

か人生を歩んでいない小童に侮辱されました、許せない私は花の十七歳彼氏いない暦十七年！でも泣かない！クリームフェアリー踊り食い！」

「恋人なんて作る気もない癖に。嫌なら聖女辞めればいいだろ、そしておれは冥魔術を辞めない！なんて素敵なファイナルアンサーだろう、砂糖仕掛けのわたしとワルツを！」

「きいつ、聖女がいなくなったら村が滅びるとか言いだしたのは他ならぬ貴方達の先祖でしょーっ！季節外れの熱き鼓動のハラミ！」

「お前の先祖もだろうが！大人はすぐそうやって人の所為にする！もう鯉なんて居ないなんて言わないよ接待！」

「すこおい」

ミミがメニューの裏表を隅々まで見ながら言う。何時の間にかテーブルに半分登って言い争いをしていた二人は、その言葉で我に返る。周囲の視線を釘付けにしていることに気付くと、ガリーナは顔を赤らめて静かに椅子に座った。

えへん、とキリアがぎこちない咳払いをする。

「ね、今の裏メニュー？載ってないわよ。それにしても沢山食べるのねえ、お二人とも」

目を輝かせて見つめてくるミミを目にし、ガリーナとキリアは目配せした。

まずい。

「ク、クーリングオフを……」

「そ、そうですね……」

駄目だ、と野太い声がした。振り返ると、無駄な筋肉を誇る店主がにこりとみせず包丁を俎に叩きつけていた。背後では火にかけられた鍋から白い湯気が上がり、彼の禿頭を光らせている。

二人は頬を引き攣らせると、小声でお互いを罵り始めた。

「なんであんなに注文したんだよ、馬鹿じゃねえの？」

「あなたが煽るからですよ。私はただ枝豆とジュースで一日の労働の憩いを得ようと」

「働いてねえだろうがお前は！　そしておれは無力で無垢な子供だ！　どうやって払うんだ、おい！」

「うとうとう皿洗い何ヶ月分でしょう……」

ガリーナは体を震わせると、身を縮めてテーブルに顎を擦り付けた。以前に一度、持ち合わせが三十エンス足りず、一週間皿洗いをさせられた事がある。たった三十エンスだ。ライムジュース四口分でこの労働であるから、今回はどれ程であるかは想像することを脳が拒む。キリアも同じく顔を青くして既に逃げる準備をしていた。

少年の襟元をがっしと掴んだまま、ガリーナはこの間読んだ冒険小説のはぐれ聖騎士を思い出した。

彼は自らの身分を隠し、悪党共の一味と成り済まし、ヒロインに危機が迫った時に颯爽と剣を構えて登場するのだ。ばったばったと味方の裏切りに臍を噛む悪党を切り崩し、微妙な後味の悪さを爽やかな笑顔でカバーして去ってゆく。

この危機を救ってくれるのは彼しかない。ちやりんちやりんと金貨を振り撒き、料理の湯気の彼方に笑顔と共に去る聖騎士。ああ、彼は今どこにいるのだろう。こんなにも彼を必要としているヒロインがここに居るというのに。そんな渴望と共に周囲を見回した。

「ええい、目が合えば皆があからさまに顔を逸らします。キリア、なんとかしてください」

「お前、偶には年長者の威厳を見せてみるよ……」

「なあに、どうしたの？　何の相談？」

ミミの問いに、幽鬼のような力無い笑顔で返した二人は、絶望に打ちひしがれた。

その時、扉が開いて派手な老人が飛び込んできた。村内会副会長のマールである。人一倍祭好きでおせっかい焼きの齢六十は越すであろう小柄な老人は、派手な色のシャツに派手な色眼鏡、派手な柄パンに身を包み、大きな声を張り上げた。

「おう、二ヶ月ぶりのお客さんだぞ！　ああ、ミミちゃんは半分身内だからな、早くお母さんの機嫌が直ると良いな――。で、今回は

なんと領主んとこの料理人さんだ！　ここの糞不味い飯が食べたいと来てくださったんだ、精々無い腕振るえよ坊主！」

うるせえ、と店主が怒鳴り、ガリーナ達は一斉に扉の方を見た。派手な老人の背後から、初めて見る顔の青年が店に入ってくる。穏やかな相貌が店内を見回し、視軸はガリーナで止まった。黒い瞳は、その派手な色の聖服に僅かに戸惑ったようだった。

歓迎会だ宴会だと大騒ぎを始める祭好きな大人達の中で、少女は感極まった瞳で青年を見つめ返す。

「聖騎士様……！」

キリアは髪をひと撫ですると、にやりと口の端を上げた。

「へー、で、新しい料理の開拓を命じられてここに来たと。大変だなあ」

「ですねえ。でも、こんは、ひんほうははひへはへはひはふはへえ」

口の中にしこたま枝豆を放り込んだガリーナの言葉に、異邦人は困ったように曖昧な笑みを浮かべた。

「つまり、こんな貧乏酒場にお目に適うものがあるのであるのか、と」

短い稲穂のような髪をした少年が鯉のタタキを頬張りながら解説すると、料理人は――確か、カイクと名乗ったその青年はやつと会得したように首肯した。

「料理の体系は遠方に行けば行くほど異なるものだし、その上各々の家伝の家庭料理もあるからね。あなどれないんだよ、その――田舎の料亭でも」

「はひははっへんははひへぶらっ」

キリアに後頭部を平手打ちされ、ついに少女は黙り込む。「つまり、何か新たな発見はあったであろうか、と」少年が再び解説する。「そうだね、このクリームフェアリーのタレに林檎の絞り汁を入れているのは初めて見た。それに、こっちのぶつ芋にはコイビトタケが微量ながら振りかけられてる。乾燥させて香として焚けば幻覚を引き起こす茸を使うとは、なかなか思い切っていて面白い。思っていたよりもレベルが高いね」

「おっさん、聞いたか。領主お抱えの料理人にお墨付きだぞ」

店主は相変わらざるの無然とした表情のまま調理を続けるが、まんざらでもなさそうだった。無愛想が売りの男だが、実は料理と人情に賭ける情熱は大変暑苦しいものを持つのである。

店の中は既に満員御礼で、給仕達が大忙しで人の間を縫って皿を

運搬、回収している。あちらこちらでんでんばらばらにグループを作った大人達は、それぞれが好き勝手に喋りまくっていた。大きくは無い店であるのに、すさまじい喧騒である。カイムは穏やかな目で、楽しそうにその声の波の応酬を眺めていた。

「それにしても、こんなに歓迎されるとは思わなかったな」

「でしょう？ みんな、とっても気さくな人達なの。あたしが去年初めて来た時もこんな感じだったのよ。きっと、ただ単に宴会がしたいだけなのね」

ミミが莓ミルクをつつきながら、どこか眩しそうな目で客人に言う。キリアとガリーナはまだ料理を貪りながら、うんうんと首を縦に振った。

「少なくとも私は今日ほどお客様を歓迎したことはありません」

「うむ、おれもだ」

「なんせ折半ですから。それはもう有耶無耶に」

「うむ、さよなら皿洗い」

カイムはもう一度笑みを見せた。一見気弱に見えるその微笑は、彼が困惑した時に出す癖のようなものだった。この二人と同じテーブルについた時から、もう十回程繰り出している。

領主といえば、この村にとって雲上の存在であった。見えはしないが確実に強大な力を持ち、村人達はその見えない存在に対して納税している。雲上の館の料理人達と言えば当然腕の立つ人間であり、料理長ともなれば下手な料亭よりもよっぽどの稼ぎがあるだろう。

平穩そのものの村に突然現れたカイムという料理人は、歓迎の対象であると同時にほんの僅かな畏怖をも同時に喚起させる、そんな存在だった。

「あれ、ハラミ召し上がらないんですか？ いただいても良いですか？」

全く畏れを感じていない人間も、ここにいるのだが。

「ところで、さっきのお話の続きだけど。ガリさん、聖女って何なさってるの？ 鐘を落とすのがお仕事？」

「聖女？ ガリの聖女って、君が？」

だからガリじゃないです鐘も不可抗力ですと不平を呟きながら、ガリーナはヴェール越しに頭を擦った。たんこぶのことを思い出したのだ。

「ガリーナです、ガ・リ・イ・ナ。趣味はお裁縫と畑仕事、奥様のための服飾教室でお小遣い稼いでます。嫌いなものは黒い悪童、好きなものは動物、特に犬とか狼とかにゃんことか」

「聖女って何なさってるの？」

笑顔で少女の答えを封殺し、再度同じ問いを返すミミは無邪気にも不思議な迫力がある。カイムも注視しているのに気付くと、ガリーナは咳払いして姿勢を正した。

「守ってるんです。——人界と、冥界の境界線を」

「嘘だけだな」

「本当ですってば小童！」

キリアは非難を無視して芋を口に放り込む作業を続ける。

「この村には、絶えることなく聖女がいる。ガリーナは二十二代目の聖女の生まれ変わり。聖女が村を捨てたり彼氏を作ったりすると冥界の力が人界に溢れ出して村が滅びるんだとさ。あほくさ」

「きいつ、全部言いましたね！ 私が言おうとしたのに！」

美味しいところを全て少年に奪われ、聖女は齒を食いしばってばんばんと悔しそうに膝を叩く。

顔を輝かせてその様子を見つめているミミは、この話を真実と捉えているか否かは解らない。ただ一人、カイムだけが真面目な顔をしてガリーナを見つめている。

「この村を出たら、どうなるんだ？」

「滅びるらしいですよ、村が」

えへへ、とタイミングのずれた間抜けな笑いと共に少女が返す。

それは全て実際の伝承である。

曰く、聖女が村を離れると村が滅びる。従って聖女は質素に堅実に村で生きてゆかねばならない。冥魔術を学んではならない。結婚

してはならない。酒は週に五杯まで。男性に十秒以上触れてはならない。外泊は村長に届出をして二回の夜を超えてはならない。宗教を立ち上げてはならない。お布施を強要してはならない。親を大切にしなければならぬ。スイカに塩をかけてはならない。雷が鳴れば机の下に隠れねばならない。

ならない尽くしの定規が、聖女の証である。

カームはその言葉に眉を顰め、何事か考え始めた。

そして、ずいといと少女の鼻先まで顔を突き出す。

「う、え、あ、か、そ」

至近距離から漆黒の瞳に凝視され、ガリーナは大いに混乱した。翠色の眼を見開いて、身を引く。

——自分と年の近い男性に、これ程までに近くで見つめられた事は記憶に無い。

「あ、あ、あの、嘘じゃないですよ、そういう伝説と決まりなんです。わわ私はそれに従わなくちゃいけないくて」

解ってる、とカームは頷いて前傾姿勢を元に戻した。

「君はこの村を出る事は出来ない。聖女としてこの村で生活していかなければならない。そしてこのルールは誰も破ることが出来ない——だね？」

「あ。……はい」

難儀だな、と呟いて、僅かな渋面を作る。そして沈黙が訪れた。子供達はそれぞれ呆然としたようにカームを見つめ、止めていた息を吐き出す。

「なんだか無駄にどきどきしちゃったわ……」

「うとうつこの部屋、暑いです」

はたはたと両手で顔に風を送るガリーナと、未だ目を丸くしている子供達。料理人は彼らを制するように片手を挙げると、懐に手を入れて財布を出す素振りを見せた。

「あ、もう帰んの？ また来る？」

「そうだね、きっと。気に入ったよ——特に」

そつと、はたはた振られていた手を取って。

驚愕して体を固める少女に囁く。

「出来れば君と、二人で話がしたい。近いうちにでも」

そして見る者を安堵させるような優しい笑みを口元に浮かべると、立ち上がってカウンターへ向かう。それから彼の帰宅を惜しむ喧騒に苦笑しながら、手を振って外へと出た。彼の視線が最後に三人に置かれた時、扉が閉まった。

ほんの僅かな静寂の後、再びわいわいがやがやと始める大人達。話題は主に領主に関するものだった。カイムの存在で抑圧されていた全てが一気に噴出したのだ。

「見るよ、金貨だ。全部奴の奢りってことでいいのかよ？」

「気前の良いことだねえ。流石領主お抱えの料理人だよ。そういや知ってるかい、あの噂——」

「ああ、アレなあ」

キリアは漸く、口の中で停滞していたハラミをごくりと飲み込んだ。両隣に目を遣ると、ミミは呆気に取られたままで、もう一人は口をぽかんと開けたまま微動だにしていない。フォークの柄でほつぺたを突付くと、元々上気していた頬が茹蛸のように真っ赤になった。

思い出したかのように両手をぶんぶんぶん動かし、必死で風を送る。

「うふうふうふうふう暑いですこの部屋暑いです」

少年は小さな嘆息に驚愕を乗せた。

信じられん。知らないと言う事は、時に恐ろしい運命を導くものだ。

肩を落とし、独り言のように呟く。

「村一番の馬鹿に彼氏が出来そうだ……」

「誰が馬鹿ですか誰が彼氏ですか誰が誰が！ 危ないところでした、あと四秒で聖女失墜でした。恐ろしい人です」

真剣に恐怖に戦っているガリーナを横目に、キリアはもう一度深

い深い溜息をついた。

駄目だ。

こいつの馬鹿っぷりには誰一人ついて来られない。

きつとあの男だって、すぐに彼女に愛想をつかして諦めるだろう――。

「だからさあ、食べるらしいよ」

「眉唾くさいって。いくら領主とはいえ……」

恐らく達成したら村がひっくり返るほどの大騒ぎが起こるであろうこちらの話題には全く気付かず、店は噂話が満開である。蛸のよ
うな顔色をしているガリーナは、夜風に当たると言い置いて急いで
外へ出て行った。

そこでキリアは、外がもう真っ暗だということに気付いた。ここ
から領主の館までは馬で一刻半はかかるのだ。カイムはどうやら手
ぶらで来ていたようだし、泊まる事は無いだろうから、本当に帰っ
てしまったのだろう。馬は一体、どこに置いてきたのだろうか。――
まさか、徒歩でここまで？

漠然と考えるでもなく考えていたら、不気味な笑い声が聞こえて
きた。慌てて辺りを見回すと、どうやらミミが顔に笑みを張り付か
せて肩を揺らしている。

話しかけるのが怖かったので黙っていると、彼女は笑顔をこちら
に向けた。

「カイム様って、素敵じゃない？ ガリ様もちよつと変わってるけ
ど、とっても愛らしいし」

いきなり様付けである。

キリアが思わず眉を吊り上げると、彼女は可愛い顔立ちに輝くよ
うな笑みを浮かべて顎に手を添えていた。――まるで、何かを企ん
でいるように。

「ふふ、決めたわ。ミセス・ジングル学級白百合の仲介人の名にか
けて、絶対成功させてやるわよ。……手伝ってね、キリア君」

うふふふふふと含み笑いを続ける少女を見つめながら、キリア

はぼんやりと考えた。

その二つ名は老獺さとあどけなさが混在して鮮やかなハーモニーとなつて桃色のリボンを舞台とする協奏曲を演じていやしないかと。

+

深夜、厨房に入ると暗闇の中に一本だけ燭火が灯っていた。もう既に明日の仕込を終えた料理人たちの姿は無く、水の滴る音だけが闇に反響している。蛇の舌のような炎がちろちろ瞬き、その度に黒い影は大きく小さく変容する。

「早かつたね」

老人の声に、カイムは目を凝らした。

闇の中で、ぼんやりと光に照らされて男の姿が浮かび上がる。細い体を椅子に寄せ、弛緩させた手足が疲れた様子を伺わせた。

「何時も思ふのだが、君は足が速いようだ。通騎にでも転職したらどうかね」

「今回ばかりは無理です、ザロク料理長。彼女が消えればあの村は大騒ぎになる——伝承が真実にしろ、出任せにしろ」

相手の冗談を無視し、カイムはテーブルに手を置いた。

「もう、限界です。俺はあれを調理したくない」

「やるんだ、カイムスターン」

ザロクはその瞳に悲しみの色を浮かべ、小さくかぶりを振った。

青年は唇を噛み締めると、俯いて目を伏せた。黒髪が落ち、深い影となつてその表情を隠す。

「君の腕は真実素晴らしい。あれをあそこまで芸術品として昇華出来るのは君しかいないのだよ。大丈夫、一人にはしない……君の負担も、罪も、我々が共に背負うものだ」

ふつと風が吹いて燭火が消えた。

+

ぼく、ぼく、ぼく、ぼく。

奇妙な音に眉を顰めながら小道を歩み続けると、例の自称聖女が草の上に座り込んで落ちた鐘を打ち鳴らしていた。勿論、振動は全て大地が吸収するので普段の古びた清らかな音は響かない。

ぼく、ぼく、ぼく、ぼく。

したたかに陰鬱な濁音が鳴る。正午の麗らかな日差しすら、彼女を避けて通るようだった。俯き加減で一心不乱に木槌を振るう少女は、ある種鬼気迫るものがあつた。

ぼく、ぼく、ぼく、ぼく。

「……………何してんの」

「うおわう」

不意を突かれたガリーナは木槌を放り投げ、風のように立ち上がって声の主を振り返る。そして笑顔を作ると、スカートの端を摘み上げた。

「今日のテーマは河原でタイマン張った後ダチと共に見上げた空です」

良く解らないのは何時もの事だが、昨日とは違う空色の聖服とヴェールを身に着けている。キリアは感嘆とも諦めともつかない表情で小さく頷くと、そのバリエーションの豊富さを思った。気にした事はなかったが、毎日違うテーマの服を着ている気がする。——尤も、聖服のデザインはそう変えられないらしく、豊富なのはその色数なのだが。

「昼っぱらから陰々滅々と……。どうせ鳴らないんだから放つとけよ」

そうはいきません、と河原でタイマン張った後ダチと共に見上げた空色のガリーナは些か憮然としたように頬を膨らませた。

「決まりは決まりです。明け、正午、暮れ、一日三回カンカンと鳴らすのです」

「ぼくぼくと聞こえたけどな」

「……だってファイさんが手伝ってくれないから……」

消え入るような語尾で大地にめり込んでいる鐘を見下ろすと、それきりガリーナは黙り込んだ。学校——というほど立派なものではないが——帰りのキリアは、その鉄の塊に腰を下ろすと、空を見上げた。自分の腕ではこの鐘を持ち運ぶことは出来ない。ほんの少し、苛立つ。

「昨日の兄ちゃんさあ」

「あつ黒い悪童発見！」

途端に木槌を拾い上げて怒涛の勢いで地面を叩きまくる。それが演技なのか本当なのか、キリアには解らない。

「くそう、また逃がしました……。ん、さっき何か言いましたか？
キリア」

少年は肩を竦め、別にと返す。

そう、別にどうでもいい。ガリーナに恋人が出来ようが、騙されようが。

それ以前に彼女はきつと、聖女の掟だと言って異性に触れる事すら避けるだろうから。

だから、昨晚から胸をざわつかせている嫌な予感など、杞憂に過ぎない。昔から自分の勘は当たらないのだ。

頬を撫でる風に目を細めた、その時。

遠くで呼ぶ声が聞こえた。

緑色の小道、両脇に茂る木の向こうから見慣れた男が姿を現す。

彼はこちらに向かって手を振りながら、少し出っ張ったお腹を揺らしつつ小走りに駆けてくる。二人の元に辿り着いた時、彼はせえせえと息を切らせて額に光る汗の小粒をぬぐった。

「あらファイさん、こんにちは。ついにこの鐘を持ち上げてくださるんですね」

「違うよ馬鹿わたしまだ怒ってるね。そうじゃなくて、領主の使いの人が来てるよ。あんたを夕食に招待したいとかなんとかかんとか」

「へえ？」

二人は奇妙な申し出に顔を見合わせた。

今まで聖女を訪ねてきた酔狂な人間はいるが、招待されるのは初めてだ。少なくとも、ガリーナの代では。しかもそれが領主だという。雲上の人間、実のところ彼女はその名前すら知らない。

「あの、どうしてでしょう。私何かしたでしょうか。あつ、まさかこのびばーに心を奪われたり嫁にしたいとか言い出しちゃったりなんかしませんよねえ。何でしょう」

首を捻って不思議そうな顔をするガリーナに、ファイは何時も握っているお玉を振り回して「知らないよ」と怒ったように言う。「いいからさっさと行くね。上手いことしたら税も軽くなるかもよ」

昨日、宴があつた酒場『バーババ亭』は、ファイの料理屋『九里金豚』とは好敵手の関係にある。それこそタイマン張つたらダチだがライバルはライバル、そんなアレだ。従つてファイが先ほどから機嫌の悪い素振りを見せているのも、昨日の鐘や黒い悪童とは別の要素が絡んでいるのだろう。

「カームだ」

キリアがぼつりと呟くと、ガリーナは益々首を傾げた。

「うつつん……いつかと言って、昨日の今日じゃないですか。性急な聖騎士様ですねえ」

「ほらほら、さっさと行く！ 村を代表して指紋が擦り切れるまでごますりして来るね！」

また別の意図を持っているファイは、追い立てるようにして村長の家の前まで少女を連れて行く。そこには赤い毛並みの立派な馬が二頭、そして馬車と御者が佇んでいた。

副村長のマールブルが物珍しげに遠巻きに囲んでいる人々の中から現れ、派手な色眼鏡を押し上げた。そしてガリーナの肩をぽんと叩いて小声で言う。

「ガリーナ、用無しの聖女が一世一代の晴れ舞台だ。用件は知らないが、村を代表して指紋が血を吹くまでごますりして来い。せめて五

分は下げるまで帰ってくるなよ」

貢税、と低い声で言い終えると、きらりと輝く白い歯を見せて退く。あう、とかえう、とか間抜けな声を出して少女が周囲を見回すと、群集は一斉にかつと口を耳まで引き裂いて歯を輝かせた。

(こいつら……)

ここぞとばかりにぶら下がりやがつて、とキリアは三白眼でマールを睨む。派手な老人はそ知らぬ顔で嘯笛を吹いた。

「ガリの聖女様ですね。ヘイルバスク〃オルドラン〃ノム〃アルプ様が是非とも貴女と夕餉を共にしたいとのこと、命を受け馳せ参じました」

「プーさんですか」

じろりと御者が睨むと、ファイが追従笑いを浮かべながらお玉で少女の頭をぱかんと殴る。「すいませんね、礼儀のなつてない子で」また叩いた、と涙目で頭を擦りながらも、ガリーナは先導されるままに馬車に乗り込む。固唾を飲んで見守る群衆が作り出す沈黙の中、ついにキリアは耐え切れず声をあげた。

「あの、おれもついて行っちゃ駄目ですか。そいつ一人じゃ何にも出来なくてきつと、いや絶対確実に無礼を働くと思うんです」

「まあ、キリア！ 私を何だと思ってるんですか、一人で全然平気で……平気……」

心細くなつたのか、まだ持っていた木槌を握りしめて少女は小さく喉を鳴らす。御者は鉄面皮を崩さず、「ガリの聖女様だけです」と冷たく言い放つと、呆気なく扉を閉めた。そして窓から顔を出して不安げな顔をするガリーナを乗せ、馬車はゆっくりと歩を進め始める。

キリアは妙な焦燥を覚え、馬の速さに合わせて隣を歩く。少女の見下ろす視線に何を言うべきか分からず、口を引き結んで。

その時、桃色の物体がキリアの後ろから飛び出してきた。

「ガリ様、これ！」

そう言いながらミミが馬車に向けて白い包みを放り投げた。危な

げなくそれを受け取ったガリーナに、「頑張つてね」と笑顔とウィンクを送る。

馬は一気に加速した。少年の足がそれに敵うはずもなく、あっというまに馬車は黒い点となって村から離れて行く。キリアは呆然と佇み、それを見送った。

「ああ、行った行った。上手いことやってくれよ、ガリーナ」

マールブルが白い顎鬚を撫でながら、満足げにその場を後にする。それを合図に、集会は解散となった。

……無責任な！

あのガリーナを、たった一人で知りもしない奴の家に送り出すなんて。彼女はろくに村の外まで出た事がないんだぞ。

口には出さず、その後姿を睥睨したキリアの隣に、ファイが立った。ぽんぽんと少年の頭を軽く叩きながら、ぽつりと零す。

「まあ、あんな噂はどうせガセだし、気にする事ないね。大丈夫、すぐ帰ってくるよ」

「噂？」

弾かれたように、キリアはファイの一重の目を見上げた。それが昨日の料理人と似た黒い色だと気付き——いや、彼はもつと深い闇夜のような黒をしていた。思わず柳眉を吊り上げる。

「知らないの？ ……別にいいね。知らなくても」

「言えよ、おっさん。ガセなんだろ？ 教えてくれよ！」

ファイは躊躇するようにお玉を弄っていたが、やがて小さく零すように呟いた。

「領主は食べるんだってさ。女の子を」

——あの、黒い瞳。

キリアは馬車を追った。けれど、すでにその姿は胡麻粒のように小さくなり、追いつけるはずもなかった。

どこかの飼い犬が頬を舐めるまで、キリアは地面に座り込んで茫然としていた。当たらない勘が自慢だったのに、今日という今日に限って当たりそうな気がする。——いや、確信している。

「……ちつくしょう！」

草を萆つて空へ向けて放り投げる。ばらばらと散った緑の屑を、犬が嬉しそうに蹴散らしに行く。

そうだ、馬を盗もう。マールや村長らの大きな家には立派な馬が飼われていたはずだ。そいつを頂戴して、領主の元まで行って——それからどうする。捕まって叱られて仕舞いだ。

出来ない。何一つ、子供の自分に出来ることはない。

畜生、ともう一度唇を噛んだ時。

「キリア君、だっけ？」

どこかで聞いた声が降ってきた。

驚いて後ろを振り仰ぐと、見覚えのある黒髪、黒目の男がすぐ傍で自分を見下ろしていた。キリアは一瞬息を止めると、すぐに柳眉を吊り上げた。耳元で血が勢い良く巡ってくるのを感じる。

「てめえ、何しに来やがった！ 人殺し、食人鬼、ごくつぶし、変態、はげでぶちびばかあほまぬけ！ あの馬鹿をどうする気だ！」

黒い服の襟を掴み上げて小突き回すが、背の高い彼はただ困惑したように眉根を寄せて暴れる少年を見下ろすだけだった。

「何のことだ？ 俺は彼女と話をしに——」

「知ってるんだぞ、お前が、領主が人間を食ってるってなあ！ ええ、どうなんだ料理人！」

その瞬間、カイムの相貌から表情が消えた。何一つ窺い知ることの出来ない凧のような瞳、ともすれば冷たささえ感じる程の無感動な顔。彼は少年の手を払うと、視線を逸らした。

「知らない。まさかあんな噂を本気に捕らえたのかい？」

「見苦しいぞ変態、だったら何でガリを連れてったんだ！」

「……え」

途端に青年は顔から色を失い、逸らした目を再びキリアに置く。少年はその視線を真っ向から受け、力の限り睨みつけた。カイムは信じられないといった様子で首を振り、小さく呟く。

「俺のどこが変態なんだ」

「そっちかよ！！」

右手を体に対して垂直に突き出し、肘を直角に曲げて勢い良く手の甲で相手の胸に叩き付けたところで観客席からボールが流れ落ちてくる訳でもない。

無駄なエネルギーをその一撃にこめてしまったキリアは、再び地面に腰を下ろして畜生と呟いた。犬が戻って来て彼の頭によじ登ろうとする。されるがままに脱力していたら、もう一度声が降ってきた。

「彼女が連れて行かれたのは、本当か？」

「わざとらしい。もしあいつに何かあったら、おれはてめえを殺すからな。人殺しの変態野郎」

僅かな間を置いて、相手が小さく嘆息したのが判った。

「……早まったな」

ぽつりと呟くや否や、カイムは足早にその場を後にする。キリアは頭に乗せた犬をそのままに立ち上がり、待てよと叫んだ。青年は立ち止まり、こちらを振り返る。

「本当なのかよ。本当に、お前は人を——」

カイムは答えなかった。

色の失われた相貌で、ほんの少しだけ悲しそうな表情を作り、再び村の外へと向かって歩き出す。やがて歩調は早足から駆け足へと変わり、馬車と同じように黒い点となってキリアの視界から消えた。暫くそのまま突っ立っていたが、やがてがくりと肩を落とす。ずるりと犬が落ちた。

そしてうつすらと霧のかかった頭で、やっぱりあいつは徒歩でこ

ここまで来たのか、と僅かな驚愕を覚えた。ならば、自分だって馬が無くとも歩いて敵地まで行けるのではないだろうか。叱られても怒られても構うものか。日がとっぷりと暮れる頃にはきつと着くだろう。

（間に合うか、ボケ！）

だんだんと地団太を踏む。彼の剣幕に、ふんと鼻から息を出してつまらなそうな顔をした犬は、ふらふらと家々の中へと姿を消した。事は一刻を争うということを、本能が告げている。キリアは、既に自分の勘が当たらないということを否定していた。

「あれ、さっきのカイム様じゃない？ どうしてここにいるの、てつきりお館で待ってると思ってたのに」

その時、気楽な声と共にミミが現れた。手に昼食のデザートらしい青い林檎を持ち、小さく齧りながらキリアの元へ歩み寄ってくる。昨日の白いスカートではなく、桃色のキュロットを履いている姿は矢張り抜群に可愛らしく――。

いやいやいや、それどころではない。

「ガリが危ないんだ、ミミ。おれはどうすればいいのか分からない」「危ないって、まさか油ギツシユなちびでぶはげ領主に手籠めにされそうなの？ 嘘お！ いえどんな人が見た事ないけど！」

途端に飛び上がり、少女は興奮したように眉を吊り上げた。手籠め、の意味が解らなかったが、キリアはただ頷き続ける。「どうすればいいんだよ……」

あらやだ忘れたの、とミミが怒ったように言う。

「冥魔術が使えるんでしょ？ 今使わずにいつ使うのよ。カイム様がガリ様の傍にいない今、貴方が勇者になるしかないでしょ！」

「で、でも」

色々な所で色々な勘違いをしている少女に対して口を挟む気も起こらず（正確にはどこで挟めばいいか分からず）、キリアはただ相手の気迫に飲まれて仰け反った。

「今から歩きで行ったって間に合わないし、大人はきつと馬なんか

貸してくれないし」

「なんだ、そんなこと」

屈託無く笑うと、少女は後ろを振り返った。質素な家々から成る村の正面通りである。料理屋も彼女の泊まっている宿屋も、全ての通りに連なっている。

その通りに向かい、高く長い指笛を響かせると、ミミは腹の底から大声を出した。

「ミッフィー！」

最初は、風の音かと思った。そして次は誰かが家の中で階段を駆け落ちたのだと思った。最後に地震だと思い、遂にそれが姿を見せるまで、キリアは恐ろしい地鳴りを固まったように聞いていた。

大きな黒い影が二人の前に立ちはだかる。

否、正確には白いのだが、青空の光を逆光にしている為、黒く見えるのだ。それは大きな鼻を鳴らし、うるうるると獰猛な唸り声を上げるとミミに擦り寄る。

…… なんていう、巨大な馬だろう。

「紹介するわ、ミッフィーよ。あたしの親友。宿の厩でじっとしてたから、丁度良い運動になるわ」

ミッフィーは灰色のたてがみの下から覗く目を凶悪な光で輝かせる。そして、にやりと笑った。

今この馬は、キリアに対して確実に笑った。

「あ、あの、なんで馬の顔にサンマ傷が」

「どうでもいいでしょ、馬社会の抗争よ抗争。さあ行くわよ、ガリ様を助けに！」

なんてハードボイルドな、と口の中でもごもごと呟きながらも、キリアはミミの後ろに乗った。早駆けが苦手な彼は、言われるままにしっかりと少女の腰に手を回す。予想だにせぬ密着率に頬を赤らめたのも束の間、眉間から目の下まで立派なサンマ傷を走らせる巨大な白馬は、ブルルアアと馬らしからぬ咆哮を上げて走り出した。それは風というよりも、嵐に近いと思った。

+

馬車に揺られること一刻、湧き上がる不安を収めるために熟睡していたガリーナは、車輪の緩やかに回転する音で目が覚めた。窓の外を覗くと、既に車は館の敷地内で、玄関口を目指してゆつくりと進んでいるようだった。

「うー」

目を擦って欠伸をし、涎を垂らしていないことを確認した後、手に小さな白い包みを握っている事に気付いた。出発直前にミミが投げて寄越したものだ。それは袋の形をしてはいるものの、しっかりと縫い付けられた口は開きそうも無い。

「なんでしよう、これ」

揉んでみるとかさかさと言音が鳴り、砂のような葉の様な感触が指先に伝わる。すると、ほんの微かな微香が放たれたような気がした。丁度その時馬が足を止め、慌てて胸元に小袋を仕舞い込む。ついでにまだ握っていた木槌も放り込む。胸がごつごつして、とても気持ちが悪かった。

無言で扉を開かれ、振動で痺れた足をどうにか動かして降り立つと、眼前に見た事も無い程大きな玄関が現れた。玄関だけではない。顔を上げると自宅の寺院ほどの高さを持つ屋根が延々と左右に連なっている。暗い色で聳える城のような館は、嫌でも忘れかけていたガリーナの不安を煽った。

「凄いです……。一体家賃はおいくらなんでしょう」

御者にじろりと一瞥され、慌てて口を噤む。この男は少し苦手だ。先程から何を言っても、返ってくるのはこの冷たい睥睨だけなのだ。しかし、彼の役目はどうやらここまでだったらしく、館の中に入ってから執事らしき黒服が赤絨毯の上を先導して歩く。金色に輝く像や煌びやかな壺、美しい女性の肖像画がこれでもかと陳列されている廊下を進み、やがて食堂へと辿り着いた。

食堂と一口に言ってもバーババ亭や久利金豚のようなものとは雲泥の差で、薄暗い照明の中に大きな暖炉を脇に構え、ガリーナが五人程寝そべってもまだ余るほどの長い長い食卓が置かれている。その一番向こう側でふんぞり返って座っている肥えた男が居た。

プーさんだ、と確信した時、背後で扉が閉まる。慌てて振り返ると、執事はとつくに消え失せていて、ぽっかりと空いていた入り口は頑ななまでにその口を閉じていた。

いきなり二人きりにされてしまった。

（どうしよう、こういう時はどうすれば……そうだ、ごますりですごますり）

そう思い立って佇んだまましゃしゃかと両手を擦り合わせる。しかし相手は何も言わない。逆にじっとその動きを注視され、段々と居たたまれなくなつて手を後ろに隠した。

「それは何だね、何かの儀式か挨拶かね？」

プーさんが初めて口を利いた。少女に対する興味と、気だるさの漂う倦怠感、両方を併せ持つ声音だった。

「はい、えと、おまじないです。貢税が下がりますように……はっ、しまった直球過ぎました」

「なんだ、苦しいのか？ 望みはどの程度だ」

「え？ あの……五分、くらいですかねえ……」

領主アルプーは暫く間を置いた後、大仰に頷いてみせた。

いいだろう、という言葉を、ガリーナは半ば放心した状態で聞く。副村長マーブルは指紋が血を吹くまでごますりして来いと言ったが、まだ自分は十回ほどしかごまをすってない。労せずしてこんな簡単に税を下げられるとは、まさか彼は――

「プーさん、良い方なんですネ！ 感動しました！ 村の皆さんもきつと喜びます」

領主は感動で目を潤ませる少女に笑顔で頷きつつ、彼女の呼んだ妙ちくりんな名前が自分を示す事に、話題を移行させてから気付いた。

「ガリの聖女、思っていたよりもずっと美しいな。その明るい色の服も良く似合う、今までの娘達の中で最も気高く綺麗だ。さぞ美味しいだろう」

「は——はい？」

聞き慣れない単語が頻出した為、ガリーナは笑顔のまま首を傾げた。今まで聞かされる言葉は馬鹿や間抜けやガリや駄目や用無しばかりだったので、脳の処理速度が新たな語彙に追いつかないのだ。

美しい、気高い、綺麗、とは果たしてどのような悪口だったろうか。そしてその後、アルプーは何か奇妙なことを言わなかっただろうか？ 頭がくらくらしてきて、ガリーナはヴェールの上から耳の辺りを押さえた。

その時、大きな音がして自分に置かれていた領主の視軸が背後に移った。ゆっくり首を巡らせ、後ろに昨夜の青年が立っている事を認めると、初めて今の音が扉の開いた印だということが解った。

「旦那様、ということですか。俺達に何の相談も無く、このようなことをされては」

カームが少女を一瞥し、さり気無く隣に立つ。——何か、良い香りがする。

「今朝も申しましたが、彼女はあの村の大切な巫女ですのぞ」

「巫女じゃなくて、聖女です」

反論した途端に足元がぐらつき、青年が返事の無いままガリーナの二の腕を掴んだ。

アルプーが鼻で笑ったのか、短い空気の摩擦音が聞こえる。

「聖女だと、馬鹿馬鹿しい。街中で溢れかえっている乞食の予言者と何が变わんのだ。迷信に振り回されるなどお前らしくない。ぐずぐずしている様だから私自ら使いを遣ってやったのだ」

「ですが……」

「やれ、カームストーン。三人殺しが四人殺しに変わるだけだ。それにお前達料理人の首を飛ばすことなど、造作も無いんだぞ」

領主が首筋に食卓のナイフを宛がって見せ、それが物理的な話で

あることを示唆すると、カイムは黙して目を伏せた。

ガリーナは彼が眉間に寄せている皺をじっと見つめて、二人の会話を頭の中で反芻しようとした。けれどその努力とは裏腹に、何も出てこない。確かに彼らが剣呑な雰囲気では何らかの会話をした事は理解しているのだが、くらくらする頭の中では全ての事象が上滑りする。

——プーさんは、カイムさんに無理を言っているのかしら。

その程度が精一杯だった。

眠い。眠くて堪らない。

半分閉じかけた目で最後に見たものは、そこらじゅうを飛び回る極彩色の引き攣った笑顔の蝶々やそこらじゅうに咲き乱れるパステルカラーの痙攣した笑顔のきのこ、そしてカイムがじっと自分を見つめる黒い瞳と、微かに動いた唇だった。頭に水色と橙色のきのこを生やした彼は最後に、確かに言った。

ごめん、と。

自分に寄りかかる様にして気を失ったガリーナを抱きすくめながら、カイムは遠く正面に座るアルプーを睨んだ。

「何を飲ませたんですか」

知らん、と相手は目の前に置いてあった赤ワインをコップに注ぎながら返す。

「執事がやったのだらう、気の利いた事だ。——さて」

彼は赤い酒を一気に煽り、溜息と共に二人を見据えた。カイムは手前の椅子にガリーナを座らせ、体がずり落ちないようにと細心の注意を払う。

「どうやって殺すのだね、カイム。普段はザロク料理長がやるのか？ それともお前が？ 間近で見るのは初めてだな」

青年は、俺です、と無表情に返事をし、興味津々で身を乗り出してくる相手に冷たい視線を送る。

「銃や剣で一発という訳にはいきません。的確に血を抜くために、まず生かしたまま逆さ釣りにして喉を」

「わかったもういい」

些か顔を青くした軟弱な男に頷くと、幾らか逡巡した後、踵を返した。ガリーナはそんな男達の不穏な会話など知る由も無く、静かな寝息を立てている。

「――色々と、準備がありますので。失礼します」

扉を閉めた後、カイムは豪華な絨毯を滑るように厨房へと急いだ。まさか領主が獲物の少女をこんなに早く、しかも自ら呼び寄せるなど、予想外の事だった。まだ準備が整っていない。急いで同僚達に火急の用件と告げ、用意に当たらせねばならない。

しかし、今回は難しい。何せガリーの聖女だ――どう足掻いても彼女の存在を揉み消せそうにない。

「くそ、どこまでも面倒な事を」

口の中で悪態を吐いた時、厨房へと辿り着いた。

しかし、その部屋の異常な雰囲気、彼は敏感に感じ取っていた。用は無くとも何時もそこで座っている、老人の姿が無いのだ。ザロク料理長は料理に一生を捧げ、この館でカイムの上司として常に彼を導き、そして共に働いてきた同僚だ。

彼が言った、「共に責を追う」という言葉。それは小さくはあるが、カイムの心の中で安堵という名の礎として佇んでいる。

「ザロクさん、領主が彼女を連れて来ました。急がないと……ザロクさん」

薄暗い厨房を早足で横断しながら、カイムは料理長がここには居ない事を知る。焦燥と共に口を引き結び、そして再び違和感を感じた。

ザロクが愛用している椅子の上に、手紙のようなものが置いてある。訝りつつもそれを手に取り、屋外の陽挿しが挿し込む窓辺まで持って行く。

白い紙には達筆でこう記されていた。

『 辞 表 』

もう色々としんどいので辞めさせて頂きます。

料理長の座はカймストーンに譲ります。

新しい時代は彼が作ることでしよう。

私が最後の料理長でない事を嬉しく思います。

ザロク元料理長 』

「……あのくそじじい……」

カймは手の内で紙をぐしゃぐしゃに丸めると、火の消えた暖炉の中に放り込んだ。

誓いの言葉をあつさり放棄し、責を全部青年に押し付けて逃げた老人は、自分の俎板すら残していなかった。普段の気弱な顔などどこ吹く風の見事な逃げ足ぶりである。

力無く椅子に座り込んだカймは、ザロクが唯一残して行った机の上の赤い腕章を手に取り、袖に着けた。なかなか様になっていると空虚な笑みを浮かべながら、これからの事について考え始めた。

ザロクが突然失踪したことは多少は痛手であるが、自分が料理長として他の料理人と力を合わせれば、恐らく単なる杞憂と終わるだろう。彼の消失という穴を、皆で埋め合わせるのだ。

そうすれば、今まで通りの平穏と言えなくもない生活を送ることが出来るはずだ。

物思いから帰ると、青年は立ち上がって指を鳴らした。

とにかく、このトラブルに対して全ての手筈を大急ぎでこなさなければならぬ。既に心中の暗雲は天気雨程度の雲へと変化していた。

ふと、食器棚に目が行った。

白い大皿の上に給料袋が置いてある。

二袋……三袋もだ。誰か置いて行ったのだろうか？

背を這い上がる嫌な悪寒を敢えて無視しながらそれを手に取り――

―表面に書いてある字面を目に入れた。

『 辞 表 』

聞こえもしない春雷の音を聞きながら、カイムは大地に伏臥した。
そして彼は――諦めた。

「なあ、さつき馬車に乗ってた女の子、もしかしてまたアレかな」

右の門番が左の門番に小声で尋ねた。左は直立不動で正面を見据えたまま洪面を作り、うんともすんとも返さない。右は構わずに腰に下げた小剣を弄りながら続ける。

「そろそろ転職時じゃないか、俺達も。人食いの部下つてのもぞつとしないしなあ」

そう言つて大きく身を震わせる。

左は一瞬だけ右を一瞥すると、すぐに視線を前へ戻しながら重々しく口を開いた。

「単なる噂だろうが、アレは。俺は旦那様を信じる」

「そついや厨房の奴らが四人ほど出て行つたな。残るはあの影の薄いカймだけだぜ。さつき走つて帰つて来たけど、どうせあいつも出てくだろう」

「……」

「普通の人間なら耐えられないわなあ。おつと、噂だっけか。失礼」
当てつけがましい声音で小剣から手を離すと、右は石の門構えに寄り掛かった。天気は晴朗、上空には鳶が輪を描き、いつも通りの平穏な昼下がりである。目の前の路は大きく開け、両側を鬱蒼とした森が囲んでいるとは言え、この館に近づく者は一目瞭然だった。

風が木葉を撫でる音を遮るように、ぽつりと左が呟く。

「今度、子供が生まれるんだ」

右は驚いて体を起こし、相手の顔をまじまじと見つめた。左は愛想が良いとは云い難い男である。仕事に忠実なおよそ遊びから程遠い人間で、右がいくら飲みにつめても断るのが常であつた。彼は何よりも家庭を大切にしているのだ。それは右も、常日頃から痛いほど知っている。

右は彼に駆け寄つた。僅かに潤んだ横顔の瞳を見ながら、その手

を取って笑う。

「よ、良かったなあ！ お前ずっと頑張ってたもんなあ！ うん、そうだ、頑張ろう。俺も頑張るよ、左の！ あんな噂話から旦那様を守ってこそ、本当の門衛だもんな！」

「み、右の……。かたじけない」

二人は手を取り合って怒涛の涙を流した。

悪しき流言によって離れかけていた二人の心が、今ひとつになったのだ。今日この日より、二人の岩の絆は館の防壁として山より高い門をここに築くだろう。鳶が祝福するように、一声鳴いた。

地鳴りを聞いたのはその瞬間だった。

最初は森林の中の腐った倒木が倒れる音かと思った。しかしそれは絶えることなく、逆にどんどん大きくなってくる。やがて振動が地面から伝わってきた。

「な、なんだ？」

二人が周囲を見回した時——それは路の果てから姿を現した。

土埃を巻き上げながら信じられない速さで突進してくる巨大な白い怪物。黄色い凶暴な目は確実に二人を射抜き、荒れ狂う鬣たてがみは束縛された太陽のように宙へと手を伸ばす。鼻面の浅黒いサンマ傷が目視出来る頃、二人は疎みあがって手に手を取って歯を鳴らしていた。

「で、で、出た——！！」

青空高く響き渡る絶叫を追うように、二人は青空高く蹴り上げられた。ほんの十秒足らずの、短い絆と共に。

アルプーは満足げに正面で眠る聖女の顔を眺めながら、その叫び声を聞いた。館の遠くで、メイド達の絹を裂くような悲鳴と庭師や大工達の怒声が響いている。次いでどたんばたんがしゃんぱりぱりと尋常ならざる破壊音が聞こえ、彼は何事かと腰を浮かした。

悲鳴と破壊音は館のあちらこちらを移動し、やがてこちらに近づいて来た。

「な、なんだ？ 何事だ！」

短い足を精一杯忙しく動かして少女の背後の扉に向かった時、すぐ外の廊下で相次いで叫び声が上がった。

「旦那様、変な馬がきやあああああ！」

「屋敷を破壊してまわがあああああ！」

「ぎやああ家宝の壺が粉々にいいいい！」

その余りの阿鼻叫喚ぶりに思わず足を止める。賊か、と顔を青くした瞬間、扉を蹴破って巨大な怪物が姿を現した。白く太い足と丸太のような首、それが馬だと気付くには大分時間がかかった。余りの大きさに、顔が扉を潜れないのだ。

ぽかんと口を開けて後ろ退ると、小さな何かが白馬の背から飛び降りた。

「じゃ、頑張つてね。こっちはあたしに任せて。……ってあらやだ想像通りのお方」

背に残っていた誰かが少女のような声でそう良い置くや否や、怪物は窮屈そうに身を翻して元来た廊下を再び疾走する。再び巻き起こるぎやあああわあああどばあああという狂乱が遠くなると、やっと我に返ったアルプーは目の前に仁王立ちになっている少年を見下ろした。

相手の少年は挨拶も掛け声も何一つなく、両手を頭上に突き出して眉を吊り上げる。そして、叫んだ。

「注意一秒怪我一生、鉄拳一発入院生活！！」

すると、少年の掌の僅か上に、歪んだ光線が集まる。やがて光は拳ほどの大きさの金属の石飛礫となり、領主目掛けて放たれた。

「うおお！？」

アルプーは慌てて小隕石の群れから逃れるため、右往左往した。上手い具合に石をすり抜け、安堵した瞬間、最後の一発が太腿に当たる。それは成人男性に思っさま蹴りつけられたような衝撃をもたらし、彼は呻いて蹲った。

少年は漸く術を実用的に使えた事に感動したのか、やや紅潮した

顔で得意げに相手を指差した。長時間馬上にいた為か、やや蟹股気味の足でにじり寄りながら。

「巨体の癖にすばしっこいな、変態のおっさん。ガリは返してもら
うぞ」

「……………が、餓鬼め、あの村の人間だな。このままで済むとでも
思ってるのか！」

痛みに耐える歪んだ顔で睨めつけられ、少年——キリアは暫くの
間の後、さっと顔色を青くした。突きつけた人差し指をゆっくりと
引っ込める。

「お——思わないなあ、そう言えば。おれって意外と猪突猛進型だ
ったのかなあ、あはははは、はは」

笑い声が部屋に空しく響く。

キリアは顔をひくひくと引き攣らせながら、この状況を冷静に分
析してみた。

殺されそうなガリーナを救うために、ミミに乗せられたミッフィ
ーで領主の館へ突撃、なみいる小間使い達を蹴り上げ部屋を壊し調
度品を破壊しそして領主本人に向けて冥魔術。

一瞬、気が遠くなった。

「あつれえ、変だな……普段のおれならもっと姑息な手考えたの
に……………」

ぶつぶつと呟く事で逃避に走っても現実からは免れられない。税
は下がるどころか限界まで上がり、自分は死罪だろう。そう、死罪。
さっくり焼かれるか刺されるかくくられるかするだろう。

キリアは輝かんばかりの満面の笑顔で両手を広げた。

「ドッキリでした！」

「待て糞餓鬼」

駄目だ、怒ってる。

やっと回復したアルプーは、憤怒の為に顔が赤くなっていた。「
この私に何をしたのか、解っているだろうな！」

どん、と彼が力任せに食卓を叩くと、上に並んでいた彼のフォ―

クやスプーンが遙か遠くで跳ね上がる音がした。その大きな音に、ガリーナが小さく呻いて身動きする。

キリアは初めてそこに彼女が居ることに気付き、青ざめていた顔を引き戻した。

「ガリ！ おいおっさん、そいつをどうするつもりだ！」

俄然勢いを取り戻した少年を見据え、アルプーは口の端を上げた。傲慢で邪悪な笑みを発露させ、ガリーナの隣に立つ。

「私はね、若い処女の——」

「血を飲み肉を食してこの美しいハリのある肌、衰えぬ体力、尽きぬ精力を身に付けているのだよこの少女も私の血肉となるのだわっははは、だろうが。デブの癖によく言っぜ、その前にダイエツトしろっつうの」

「うぬ……何故知っている、少年！」

「え、マジだったの！？ そんなベタな！？ うわキモッ！ おっさんキモッ！！」

「……………」

領主は血色の良い肌をぶるぶると震わせ、顔を更なる怒りで真っ赤に染めながら、身を振って煽る少年を凝視する。小さな目は血走り、怒髪天を突き、震える手は瘡のよう。キリアはたと口を噤んでその憤激を後悔と共に眺めた。

手負いの猪を更に怒らせるようなことをしてしまった。解ってはいるがやめられない、このツツコミ気質の性格を呪う。

「執事ッ」

領主がそう叫ぶや否や、何時の間にか痩せた人影が彼の隣に現れていた。キリアは驚いて一步下がる。恐らく、食堂のすぐ外で呼ばれるのを予想して待機していたのだろう。執事根性天晴れな人間である。

その人物は黒い服を皺一つ無く着こなし、薄い眼鏡の底から冷たい視線を子供に置く。

「殺しても構わん、痛い目を見せてやれ」

「かしこまりました」

領主は執事にこの場を委ねると、ガリーナを抱えて食堂から姿を消した。

「おい、待てよ！」

それを追おうと思いつつも、前に出る執事の歩調に合わせてキリアは後退りした。その佇まい、放つ気迫が尋常のものではないと感じ、冷や汗が滲み出る。じりじりと距離を縮められながら、すぐに冥魔術を使えるように意識を集中させる。

「先ほど遠目に拝見しましたが、貴方様は金の術が得意のご様子。その歳で冥魔術をあそこまで使えるのは大変珍しい。良いものを見させて頂きました」

「へん、じゃあ賃料として見逃して貰おうか」

「そうはいきません。術を使えるのは、貴方だけでは無いのですよ」型にはめられたような笑みを顔に貼り付けると、執事はゆつくりと両手を広げた。手と手の中空の空間が歪な力を集め始めるのを確認した時、少年の背中が壁に当たる。

——しまった！

「シーサイドスキーヤー
疾走氷塊！」

身を切るような寒気が肌を刺したその時には、キリアは脚の筋肉に全力を込めて横に跳躍していた。地面に勢い良く転がり、慌ててその勢いを利用して左手を支点に立ち上がる。つい一瞬前まで立っていた場所には、彼の顔ほどもある氷の塊が二、三個、壁にめり込んでいた。

「……………」

標的に当たらなかつた事を悔しがる様子も無い執事と、蝋燭の光に輝く氷の刃を長い事見比べる。

そしてキリアは、全速力で逃げ出した。

「ぎゃあああああ人殺しいいいい！！ 聞いてねえよこのオッサン目がマジだよ怖ええええ！！」

「僭越ながら、まだ二十四でございます」

冷静に合いの手を入れてから、執事は再び術を放つ。

ウィンターサイトオブツガル
「帆走氷海！」

瞬間、彼の佇む場所から扉に向かっていたキリアの足元に向かって氷が張る。うぎゃ、と踏み潰された毛虫のような——毛虫が叫ぶかどうかはともかく——無様な声をあげ、少年は滑る地面へと強かに体を打ちつけた。

一瞬、息が止まる。腰を思い切り打ったようだが、目の前に星が散るばかりでどこが痛いのか全く判らない。しかし、体を起こすことすら出来ない。

涙目でばやける視界の中、執事が再び両手を広げたのが見えた。

（やばいやばいやばい、死ぬ死ぬ死ぬ！）

そう思った瞬間、思考が停止した。

「それでは、御機嫌よう。——疾走氷塊！」
シーサイドスキーヤー

「お前の母ちゃんでべそ！」

気が付くと、叫んでいた。

「な……」

思わぬ言葉に虚を突かれ、執事は術の生成を中途半端に終えた。

先ほどよりは小さな氷の刃、それでも鉄棒並の威力はあるであろう光る凶器が眼前に迫る。駄目だこりゃ死んだな、と妙に冷静にそれを見つめる。しかし、キリアの眼前まで飛んだ氷は、その目的を果たす事無く突然砕け散った。

何が起こったか解らない顔をするのは、キリアだけではなかった。「なんと。そんなに早く術を放てるとは——いや、それともそんな不謹慎な呪文で」

キリアは無意識の内に瞬時に術を編み出し、氷刃と同じ程の大きさの金属を相手に向けて放ったのだ。それも、どうでもいい悪態を呪文として。

そのどちらに驚嘆すべきか悩んでいる執事を尻目に、キリアは妙に冴えた頭で粉々に砕け散った鉱物と氷の破片を眺める。

（ああ、悪口の方が強いのかおれ……今度呪文変えよう）

漠然とそういう考えに至った時、衝撃と疲労の為に彼は氷上で意識を手放した。

執事は気絶した少年を見下ろし、暫く黙思していた。やがて館内で暴れる怪物の足音が近くなったり遠くなったりするのを耳にする、顎に手を当てて誰に言うでもなく呟いた。

「ふむ、ここらが潮時でしょうか。沈む船を浮輪にして脱出せよと申すのが我が家の家訓でございます。旦那様、長い間お世話させて頂きました。そしてまた会いましょう——我が朋友よ」

眼鏡を押し上げ、ぐったりしている少年に一礼すると、脱兎の如く館から逃げ出した。まだ破壊されていなかった調度品の一つ二つを土産にするのを忘れずに。

後には、地響きと無残に壊された部屋だけが残った。

+

——テ。

——スケテ。

食ベラレタ。

ユルサナイ。

食ベテヤル。

——才前モ！

「つてぎゃあああああ食べられてる食べられてるおれ頭食べられてるよタスケテー！！」

キリアは悪夢から逃れるように跳ね上がり、両手を力の限り振り回して頭上の物体を突き放した。

「やあね、じゃれてただけよ。ねえミツフィー？」

ウルルル、とガラの悪い白馬が同意するように頷く。しっかりとミツフィーの歯形の残った額を押さえながら、目の前に立つ怪物と背の少女を見て、やっとキリアは現実に帰ってきた。慌てて立ち上

がり、滑る足元に気を取られながらも周囲を見回す。領主もガリナも執事も消えていた。

「……生きてる……」

「氷の上でがたがた震えながら寝るなんて、貴方も奇特的な趣味のひとね。ところで、この惨状はもしかして冥魔術合戦があつたのかしら？」

見たかったわあ、と目を輝かせながら溜息を吐くミミに目もくれず、キリアは震える体を縮めた。

初めての戦い、初めての敵。初めての、人に向けての術。今更になつて、震えが来る。

「……うわあああん生きてるって素晴らしい！　素晴らしいよ、なあミミ……」

「どうでもいいけどガリ様とあのおでぶさんはどちら？」

感涙の絶叫をあつさりと流され、天井へ向けて広げた両手の行き場を無くしたキリアはそのまま固まった。徐々に明瞭としてくる頭を動かして部屋の中を見回し、暖炉の隣にある小さな扉に気付くとミツフィーの背の少女を見上げた。

「おれをここに置いてから、どれくらい経つ？」

「そんなに経つて無いわ。十分強かしら、あたしが陽動作戦にあたつてる間は」

あの破壊工作は陽動作戦だったのか、と口の中でもごもご言いつつも、キリアは扉に向かって駆けた。

「領主もガリも、廊下では見なかったよな？」

「ミツフィーが通れるほどの広さと高さの所では一度も……って、もしかして逃がしたの？　何やってたの、あたしが必死で命賭けてる間！」

だん、と主人の怒りを感じた怪物が地面を打ち鳴らす。キリアはノブを滅茶苦茶に回して鍵を壊し、蹴り開けながら、今さつき死にかけていたことは黙っておくことにした。

ドアの向こうは薄暗く狭い渡り廊下になっていて、裏庭に面して

いる。この先には穀物庫、倉庫、小間使い達の寄宿舎、そして厨房があるようだった。アルプーはガリーナを連れてここから出て行ったに違いない。

「逃がさねえよ、絶対に。止めさせるんだ、あんな馬鹿なこと」

ミミはその言葉に怒りを鎮めたようだった。そして「当然ね、あの不健康そうな方はガリー様に相応しくないわ」と笑うと、窮屈そうに佇む白馬の腹を蹴る。

「十五分よ。それ以上は流石にミツフィーも飽きちゃうだろうから」再び騒乱を巻き起こしながら、廊下を駆けて行った。

最後まで彼女の勘違いを是正しないまま、その後姿を見送ることなく少年は狭い廊下に飛び出した。石造りの地面は、先程までの華やかな絨毯に慣れた目には随分と無骨に映る。しかし丁寧に均された様子を見ると、食事の際にはここから料理が食堂へ運びこまれるのが想像に難くない。

裏庭は非常に広大で、遠くでは整列しているメイド達の姿が見える——普段からの避難訓練が役に立っているようだ。全速力で駆けながら、廊下から出る扉を片っ端から蹴破って進む。

八つ目の扉を開けた時、彼は勢い余って転びそうになった。

そこそ正に捜し求めていた厨房で、奥には見慣れた三人の姿があった。

ガリーナと、彼女を抱える領主、そしてそれに対峙するカイク。

ミツフィーよりも速くここに到着していたらしい彼の手には、研ぎ澄まされた包丁が鈍い光を放っていた。

「ガリー!!」

キリアは絶叫しながら、薄暗い厨房へと飛び込んだ。

突然の闖入者を認めると、アルプーは傍の食器棚の中からフォークを取り出してガリーナの喉に突きつけた。

「子供、動くとこの娘を殺すぞ。術も使うな」

キリアは慌てて立ち止まる。言われなくたってもう冥魔術は使えない。連続して何度も使うと命に危険を及ぼす事は、術を嗜む者ならば誰しも熟知の所である。

だから力の限り、肥えた領主と佇むカイムを睨み付けた。彼女を人質にとられては何一つ出来る事は無い。

アルプーが焦燥的な、ヒステリーじみた声を上げた。

「よくも私の館を滅茶苦茶にしてくれたな。お前は死刑だ、小僧。村に帰って余計な事を言われても困るからなあ、ひひ。どうやって死にたい？ お前も私の夕餉になるか？ ひひひ」

「じ、冗談じゃねえ！」

危うい色を放ち始めた男の目に、少年は小さく身を震わせて顎を引く。この身を切り刻まれてこの男の血肉となるなんて、想像するだに吐き気がする。ご先祖様に顔向けが出来ないにも程がある死に様である。

カイムはまだ黙っていた。そしてアルプーの手の中のフォークと、ぐったりしているガリーナを代わる代わる眺め、やがて持っていた包丁を俎板の上に突き立てた。

「もう止めましょう、旦那様」

低く漏れた言葉は、領主の予想の範疇内にあったものらしい。

彼は邪悪な笑みをますます深くし、鼻を鳴らした。

「意味が解って言っているのなら狂気の沙汰だな、カイム。お前達は何人殺した。私が口を噤んでいるからこそ、お前は平穏な生活を送ってこられたんだぞ」

キリアは柳眉に怒りを顕わにして領主を凝視した。

（この野郎、最後には全部料理人の所為にする気だ）

もしも彼の所業が明らかになった場合、領主といえども殺人の罪は逃れられない。しかし彼は、その罪の全てを「料理人達が勝手にしたこと」だと言うつもりなのだ。ゆえに自分は知らずに少女達を食べた、と。一介の小間遣いがどう反論しようとも、ロードの権力はそれを一蹴出来る。

「てめえ、汚え脂肪どころか頭ん中にも腐った味噌を詰めてやがるのか」

「馬鹿を言つな、お前達が馬鹿なだけだ。後先も考えず、その場凌ぎの行動をする——まこと民草は頭が悪い。それを支配し束ね上げる我々の苦勞も少しは考えて欲しいものだ」

「なんだと……！」

体中を循環していた血液がすべて頭に昇るのを感じ、キリアはその奔流に任せて術の発動の準備をした。今撃てば恐らく鼻血の一つでも出して昏倒するだろうが、それでも構わない。

この怒りを発散出来なければ、すぐにでも憤死してしまいそうだった。

つい先程見つけた最も自分に適した呪文、最高の精度の金の術を引き出す言霊、目の前の男に対する世界で一番冴えた悪態を探しながら、少年は両手を前に突き出す。

そして小さく息を吸い込み——。

「キリア」

突然かけられた声に、キリアははっとしてアルプーの手元を見た。片手に抱えられたガリーナ、そしてもう片方の手に握られたフォーク。その先端は彼女の喉に密着させられている。

声をかけたカイムを見ると、厳しい顔をして少年を見つめていた。

「お前……」

何考えてんだよ、と喉の奥で唸りながら、キリアはどうか掲げた両手を降ろした。

カイムは今まで、領主の命令で少女達を殺してきたはずだ。そし

て今更になつて、もう殺したくないと言い出している。何故、今なのだ。何故、領主の命令に従わないのだ。彼にとっては、何時までもアルプーの保護下で罪を犯し続ける方が得であるはずなのに。

キリアは怒りと混乱と情けなさではち切れそうな頭を無理矢理に横に振って搾り出すように言った。

「今更悪かったとか思ふんなら最初からやるんじゃねえよ、ぼけかす変態白髪はげ」

「変態でも白髪でもはげでもない」

「じゃあ食人鬼殺人鬼でぶ馬鹿あほ外反母趾」

青年は僅かに眉を吊り上げ、キリアを睥睨する。

「……君と話す気は無い。さつさと帰れ」

「そうは問屋が卸しませんよド低能。おれが帰る時はガリも一緒だつってんだろがうんこ」

「聞こえないのか、帰れと言ったんだ！」

「良いとも、二人して一緒に居るがいい。土の下でな」

低音で口論をしていたカイムとキリアは、その鶴の一声で息を止めて領主を見た。

カイムの表情が凍ったのが視界の端に映った時、キリアはアルプーがフォークを頭上に翳す姿を見た。

「カイム、お前が殺せないのならば私がやる。血のスープは、今回は諦めるよ」

料理人が息を飲んだのが聞こえ、キリアは呆然とその銀色に鈍く光る食器の先端を見つめた。

「よせ……止める。それを振り下ろしてみろ、おれはお前に同じ事をしてやるからな！！」

アルプーは口の端で笑っただけだった。

キリアは竦んだ体で駆け出そうと思った。

カイムが俎板に突き立った包丁に手をやった。

その時だった。

閉じられていたガリーナの目がゆっくりと開かれたのは。

彼女は眠そうな目を擦り、ぼんやりと地面を眺めていたが、やがて自分を抱えている男に目を遣った。

キリアは少女の名を呼ぼうとして声が出ない事に気付く。体が硬直している。カймも、アルプーも、キリアと同じく時間が止まったように今や完全に覚醒したガリーナを見つめた。

彼女は振り上げられた頭上のフォークには目もくれず、じつと視軸をアルプーの顔に置いている。状況が理解出来ているのかいないのか、今迄の会話を聞いていたのかいないのか、妙に凜々しい表情をしていた。

そして彼女は、ぽつりと呟いた。

「きのこ」

「……何？」

突如ガリーナは領主の腕の中からすり抜け、胸元から木槌を取り出す。

そして振り翳した。——アルプーに向けて。

「覚悟おー！！」

「な、な、な！？」

間一髪、アルプーは巨体を転がして無様に地面の上を横滑りした。ガガゴン、という硬い音と共にすぐ後に置いてあった椅子の背が真つ二つに叩き割れる。ザロク元料理長が愛用していた椅子である。

あわや脳天炸裂、いや頭蓋骨陥没の危機。聖女の握り締めた木槌は、恐ろしい強度を持っているようだった。

彼女の攻撃は一度では終わらず、転んだザロクを追い回し、彼の放棄したフォークを粉々に折り砕き、実に十回続いた。

カймもキリアも、口を開けて呆然とその様子を眺めているだけだった。

一度相手と距離を取り、一息ついたガリーナは、竦み上がっているアルプーに木槌を突きつけて高らかに宣言した。

「いつもいつも私の邪魔ばかりしてああ悔しいったら今日こそはこの私の軽やかなステップでぎっくり踏み潰してあげまする」

駄目である。

瞳の中にうずうずが出来ている。

「執事の飲ませた薬だ」

カイルが目元を引き攣らせながら呟き、キリアはそれでなんとなく状況が解ったような気がした。一体何を飲ませたらここまでおかしくなるのだろう、と妙に冷えた頭で冷静に考える。只でさえアレな聖女が益々とんでもない事になった。

そして次の瞬間、これが好機だという事に気付いた。

「ガリ！ ガリーナ！ 強敵と書いて友と読む猫が川原でひっくり返った俺の空色のガリーナ、こっち来い！」

「あんですかつ」

彼女は領主を追い掛け回すのを止め、キリアを振り返る。相変わらずうずうずはそのままだったが、効果はてきめんだった。少女は覚束無い足取りで少年の元まで来ると、

「蜂蜜一緒に食べたいんならあの人をお願いしてください」

と一言言ったきり、再び崩れ落ちる。慌てて彼女を抱きかかえ、重みで膝をつきながらもその穏やかな寝息を確認し、キリアは今度こそ地面に座りこんだ。

キリアの苦労も周りの惨劇も自分の現状も知らず、あんまり幸せそうな寝顔をするので段々腹が立ち、頭を叩いてやる。

その時、何時の間にか隣に来ていたカイルが、少年の頭の高さまでしゃがみ込んだ。それに気付かなかったキリアは大いに驚いたが、彼の次の言葉ですぐに冷静になる。

「逃げるんだ、今なら衛兵も門衛も混乱している。あの馬と一緒に出れば大丈夫」

「おま……兄ちゃんは、どうすんだよ」

俺は大人だから、と彼は何時もの困ったような笑顔を作る。

「責任を果たさないとね。今からなんて、遅すぎるくらいだけど」つまり、それは――殺人の罰を受けるといふ事なのだろうか。

そんなもの、死罪に決まっている。首を刎ねられた後、悪ければ

晒し首だ。

嫌だ、とキリアは咄嗟に息を飲んだ。カイムは憎むには余りにも善良すぎる人柄をしている。そんな酷い死に方をして欲しくない。けれど、罪は罪だ。自分一人が我俣を言った所でどうにもならない。

少年は神妙に頷いてみせ、それを合図にカイムも立ち上がった。正面には、荒い息をついて髪の毛を乱しに乱したアルプーが起臥していた。

「き、貴様ら、許さんぞ……。絶対に許してなるものか！ 村ごと焼き払ってやる！」

「何馬鹿言ってんだ、おっさん！」

ガリーナを背負った為に下がった頭が遮る視界にふらふらしながら、キリアは叫んだ。出口が見えないらしかった。

「もう終わりだぞカイムお前の罪を公にしてやる、お前達の罪をな！ ザロクも、他の料理人も、まとめて五人とも死刑だざまあみろ！ ついでにそいつら二人もだ！」

そう叫ぶと、満身創痍の領主は高らかに哄笑した。

カイムが小さく嘆息する。その醜態に呆れたのか、諦めたのか、力の無い溜息だった。

「皆辞めましたよ」

言いながら、前掛けのポケットから四通の手紙らしきものを取り出す。

笑い声を引つ込めたアルプーがぼかんとそれを眺め、手紙がどうやら辞表らしいと気付き始めたと同時に、その顔にはほとんど血が昇っていった。初めてカイムの赤い腕章に目を遣ると、聞き取れない程の早口で唾液を飛ばしながら大声で叫ぶ。

「あいつら、逃がすものか！ 必ずひっ捕らえて全員縛り首にしてやる！」

「旦那様、お話があります」

「いや縛り首よりも打ち首かな何せ人殺しだからなあ、極悪人は風紀の為に見せしめにする必要が大いにあるから」

「旦那様」

「勿論貢税は一割増しだぞいやもつと上げてやる、この私をコケにした罪は何よりも重」

「うるさい黙れ」

「……………」

アルプーは再び黙り込んだ。今の言葉がすぐに理解出来なかったのだ。

その言葉を発したカイムは、普段と変わらぬ静かな表情に、ほんの僅かな決意らしき色を浮かべている。今のは聞き間違いか何かだろうか、とアルプーは懊悩し始めた。彼の知っているカイムスターンという男は、下賤な出の割には誰よりも礼節を弁えた人間だった。流れの料理人だった身元も曖昧な彼を雇った事は大層感謝されたし、アルプーにとつても彼の料理は一番のお気に入りだった。誕生日に出されたマカプのゼリーはまるで海の底から生まれた青い宝石のようで、頬つぺたが落ちそうな舌触りと芳醇な香りに乗せられた味わいは水の女神もかくやの絶品。

「ごん、と音がして彼は我に返った。

前の見えないキリアが見当違いの壁にガリーナの頭を打ち付けもんどりうって倒れた音だった。その衝撃でお玉と俎が軽い音を立てて二人の上に降り注ぐ。

「……………何だ、カイム。命乞いか？」

少し落ち着きを取り戻し、血相をやや元に戻してアルプーは尋ねる。

「まさか。俺のした事はした事、誰にも許しを乞う気はありません。それよりも大変でした、貴方の望みの後始末をするのは。少女には家族も生活もありましたから」

「今更恩を売ろうというのか。感謝しているぞ、お前の料理した少女は絶品だった。だからお前の墓参りくらいはしてやるつもりだ」

カームは首を振った。

アルプーはそれを達観と見做したが、妙に落ち着いた態度が鼻についた。

「何より大変なのは、人食いなどという事をしたら冥界の奴らの好奇の目が集まる事です。冥人達が面白がって貴方の所へやって来るかもしれない——だから俺は一層心を砕いたんです、この件の始末に」

「……冥界？ な、何を言っているんだ。そんなの迷信だろう」
訳が解らないという顔でアルプーは料理長を見つめる。

殺人への罪悪感と死への恐怖でついに狂ったか、と戦慄する領主に目もくれず、相手は俯いて自らの赤い腕章を弄り始めた。

「美味しかったでしょう、少女の血のスープとソテーは。肉を絡めたパスタも」

「あ、ああ、絶品だった。お陰で私はお肌ツヤツヤ、むくみも取れて髪は若返り精力も回復して」

それは良かった、とカームは覇気の無い声で呟いた。

「町で一番の豚ですからね」

……………。

「——へ？」

間拔けな声が響く。

次いで、ごべ、と音がした。出口からは遠く離れたあらぬ所で彷徨っていたキリアが、驚いてガリーナを床に落とした音だった。

当のカームは表情も変えず、腕章に目を落としたまま続ける。

「あほですか、あんたは。常識で考えてください。誰が人間を殺して食卓に上げますか。全部豚ですよ、あれは」

「な、な、なんだとおおオオオオ！？」

あらん限りの声を振り絞った絶叫は厨房を震わせ、館を揺らし、

遠く庭で整列し避難していたメイド達を不審がらせた。最も古参のメイドはその奇怪な声を怨霊と勘違いし腰を抜かした挙句臆たけし乙女の如く可憐な姿勢で失神した。

それはともかく。

「で、では、ザロクは——他の料理人達は」

粟を食うとか鳩が豆鉄砲を食らうとは正にこの事である。

アルプーは喉を通る空気の摩擦音と共に、喘ぐように目を白黒させながら訊いた。対照的にカイムは緩やかに視線を上げ、両手を前に組んで主に答える。

「皆、貴方を騙し続けるのが面倒になったんですよ。少女に資金を渡して王都に逃がした上で、あたかも人間を調理するかのように慣れない味付けの豚料理を出す。勿論資金は我々のポケットマネーです。誰がこんな職場に固執しますか」

後できちんと請求しますので、と肩を竦めて続ける。

「俺はただ、平穩を好んだだけです。ガリの聖女だけは村から出す事が絶対に不可能でしたので、失敗でしたが——。遅かれ早かれ、暴露しなければなりませんでしたから丁度良いと言えば丁度良い。貴方が食人などという稀に見る馬鹿な考えを捨てなければ、全ては解決しないのですから」

領主は顔を真っ青にした後、真っ赤にし、黄色になり、土気色になり、やがてもう一度赤くした。

「ふざけるな、ふざけるな！ この……ふざけるなッ！」

だんだんだんと地団太を踏み、片足だけでは憤激を押さえ込めず、ぴよんぴよん飛んではだすんだすと地面を打ち鳴らし、しかしすぐに疲れて滝のような汗を出す。その滑稽な様を、遠く離れた壁際で少年が確りと脳裏に刷り込んでいた。

「貴方が殺人者になるのを防いで差し上げたんです。感謝こそすれ、罵倒される謂れはありません」

白々しくすまし顔で言い放つカイムを血眼で凝視し、アルプーは奇声とも悲鳴とも言えぬ音を喉の奥から搾り出した。ベストを引き

ちぎりサスペンダーを弾きシャツを切り裂き、これ以上無い程の激情を込めて地面を踏む。

そして絶叫した。

「ち、ち、ち、調子に乗るなよ小僧！ あんな不味いものを食わせおつて、か、か、覚悟しろ！！」

しろおお、ろおお、おお……。

木霊が消えるまで、沈黙が続いた。

肩で大きく息をしながら、領主はカイムを凝望する。相手は端然と背を伸ばし、目を閉じていた。永遠かと錯覚する無反応の時間、その後に。

青年はゆっくりと瞼を開き――

「ああ？」

見た事もない程の、凶悪な光を放つ黒い瞳がアルプーを射抜く。その眼光は刃に似て、アルプーの脳天を両断せんばかりの鋭さ。

領主は怒りの熱が急激に引いてゆくを感じた。代わりに冷たい汗が毛穴から逃げるように噴出する。

本能が気付いたのだ。

怒らせてはいけない人間の逆鱗に、触れてしまったということを。

(マ、マーマー……！)

亡母の顔を思い浮かべて逃避を図っても無駄である。完全に目の据わった料理長は、物凄い気迫を放ちながら彼の元へと歩んで来た。気のせいか、ごおおおという風の幻聴すら聞こえてくる。

「豚の血のスープ、臭みを取るのにどれだけ苦労したか！ 香草に浸し！ 内臓を洗い！ じっくり煮込み！ 仄かな甘みを出す為に隠し味として最高級のジャジャ鶏の卵を使い！ 肉もそうだ、普通の豚肉と違う味わいを出す為に何度夜を明かした事か！ それを食べた貴様は美味だと喜んだ、違うか！」

「う、あ……いや、そ……」

がつし、と自ら破ったシャツを握られ、襟元を掴みあげられる。

「貴様は自ら感じた至福の時をも否定するのか！ 幸福の在処を無に帰し、俺の料理を否定し、死んでいった豚を否定する、その感謝を忘れた態度が最高に気に食わん！ 豚と親に謝れ、このブタ野郎ッ！！」

「う……うええ……」

脳裏のマーマがあらあらへいちゃんったらおいたが過ぎたわねえいい加減にしないとママ怒っちゃうわよと笑顔で囁く。

「ほお、謝らんか。中々良い根性をしているな、糞ブタ！ だが發揮する場所を間違えている——それとも、ここを」

「……ぶえ……」

「——戦場だと、認めるのか！」

——結局、延々と料理長に説教をされた領主は、土下座し涙を流して豚と親と少女達と料理長に謝った。怒涛のように迫る言葉の海に飲み込まれ、死を感じたのは生まれて初めてだった。

新料理長は、お母さん以上に怖かった——。

+

「あー、その、つまり何だ。兄ちゃんは何も犯罪を犯していないってこと？」

そう尋ねると、相手は少々極まりが悪そうに答える。

「いや、犯しているよ。少女を殺して料理しろという彼を謀って騙していたからね。それが俺の罪と言えば罪」

はあん、とキリアは間の抜けた声で返した。

後先考えぬ馬鹿どころではない。最初から騙していたのだ、この青年は。

「なんかなあ……すげえ馬鹿みたいだな、おれが。一人で空回りし

て大騒ぎして。はあ」

肩を落としてカイムの後を歩きながら、キリアは続けた。

青年に背負われたガリーナは、そんな少年の失意どころか自分の身に起こっている事に一切気付かず熟睡している。時々むにやもにや何かを呟いて幸せそうに笑い、それがまた腹が立つやら気を挫かれるやらで、キリアは何度目かの嘆息と共に周囲を見回した。

廊下の状況は惨憺たるものだった。ミッフィーが荒らした轍に加え、まるで台風でも起こったかのような滅茶苦茶な破壊の跡があり、色々な物の破片を避けて歩くのは一苦労だった。想像していたよりも遙か上を行く惨状である。これでは暫くはこの館の機能が停止するだろう。

「要するに、アレだ。兄ちゃんはペテン師だってことだ」

「心外だな、それでも結構胸を痛めてたんだぞ」

「じゃあ詐欺師」

「……もつと心外だ」

無然とした様子で返す青年に、キリアは舌を出して見せた。

放っておいても、彼がなんとかしてくれたのかもしれない。わざわざ慣れない馬で駆けつけ、慣れない戦いをして死にそうになった事も、本当は無駄なことだったのかもしれない。そう思うと、どんなよりとした雲が頭の周りを取り巻くのだ。

「でも、君達が暴れてくれたお陰で全てを捨て去る踏ん切りがついたんだ。ありがとう」

青年が振り向いて彼に笑いかける。顔の周りの暗雲を手で叩き消しながら、キリアは別にとぶつきら棒に返した。実の所、少しだけ嬉しく思ってしまったのだが。

「ところで、なんでそんなに離れてるんだい」

立ち止まったカイムが遙か遠方で怪訝な顔で尋ねると、少年も慌てて立ち止まって一定の距離を保つ。頬を一筋の汗が伝って落ちた。

「いや、なんつーか、その。はは」

「変な子だな」

「ははは」

お前の方がよっぽど変だよ、と心中で絶叫しながら愛想笑いをする。

先程の人が変わったような剣幕に喝破された哀れなアルプーを目の当たりにすると、カイムに安易に近づくのは蛮行であると思えた。それに、と荒れた廊下を振り返る。

厨房から離れるにつれ、嵐の爪痕は弱まってきていた。

（兄ちゃんが怒った時、確かに風が吹き荒れた。これは冥魔術だ、間違いなく。しかも半端じゃない強さの）

使用人が全て庭に避難していて良かったと思う、それほどまでに強力な術。領主に対して怒りをぶつけた際に発動されたものだとしでは、純度が低く対象も厨房を中心とした広範囲という無為な風の術である。ならば恐らくカイムが無意識下で発動させたものなのだろう。

（こんな強力な術を無意識に？　ありえねえ、どんな歴史上の有名な冥魔術遣いだって出来やしない）

距離を保ちながら相手の様子を伺うと、惨状に苦い顔をしただけで何も言及しようとしていない。彼が馬よりも早く館と村を行き来したのも、術が関係しているのだろう。

キリアの中で、カイムスターンという男は「厭な敵」から「危ないかもしれない味方」へと変化していた。

「さつき、領主に冥界がどうのと言ってたよな。あれってどういう事？」

警戒しながら尋ねると、カイムは再び立ち止まり、困った様な表情で振り返る。

「……冥人っていうのは、暇人が多いと聞くからね。アルプーみたいな馬鹿な事をする人間の所に見物に来るかもしれないと思ったから」

「クラビト、なんてただの伝説だろ。本当にいる訳無いじゃんか」
不審を顕わにする少年に対してカイムが言葉を詰まらせたその時、

廊下の角から男が現れた。真っ先に辞表を出したのである。元料理長のその姿を認め、青年は口を噤んで向き直る。老人は青い静かな瞳にカイルを映すと、小さく呟くように言った。

「やはり、こうなったか。最後の料理長は君なのだ——カイルスターン」

ザロクはほんの僅かな悲哀と共に青年を見つめた。彼の赤い前掛けには大通りの有名料理店のアップリケが輝いている。フォークとナイフを構えたはちきれんばかりの暑苦しい笑みを浮かべる筋肉隆々の漢の絵だ。

カイルは小さな笑みを浮かべると、「ザロクさん、」と優しい瞳で見つめ返す。

「アルプーからもぎ取ったこれまでの出費の給付、貴方に分け前はありません」

矢庭にザロクの相貌に絶望と驚愕の緋い交ぜになった表情が発露した。

「な、なんだってええええ！ カイルくん待ちたまえ、そこを何とか！ 老い先短い老人に愛を！」

「ええい離せ！ 全部俺に押し付けて逃げていった癖に、しかもしつかりと転職までして！ 悪意有過失に慈悲は無いッ！」

「カイルくうううん……！」

追い縋る元料理長を蹴り倒して屋外へと駆け出す新料理長を目で追いながら、キリアは凜々しい表情と共に思った。

まあいいか、と。

門の外では、ミミが退屈そうにミッフィーの上で待っていた。

キリアとカイル、そして彼の背に負われたガリーナを目にすると相好を崩して手を振る。白い怪物が主の感情を感じ取って勝利の嘶きを上げた。しかしそれは嘶きというよりも、馬にあらざるべき咆哮だった。

「ちゃんと救出したのね、素敵だわ！ 障害を乗り越えてこそ愛は

成就するものよね！」

何の事だかさっぱり解らない、という顔でカイムは微笑して返す。キリアは半眼で曖昧に頷くと、「無くてもいい障害だったけどな」と無然と呟いた。とにかく今はただ疲れた。早く帰って眠りたい。

「という訳で、例の領主に対する噂、是正しておいてくれるかな？」

「ああ、しとくしとく。領主は豚が好物で都に憧れる貧乏な少女に投資して王都に行かせた心の広い紳士だってな」

「それでいい、上下関係は信頼で結ばれるのが一番良いからね」

なんのことだかさっぱり解らないわ、と一人蚊帳の外にいるミミが不満げに漏らした。

「そんな事より、ガリ様に何か変わった事は無かった？　をとめらしくなった？」

「をとこらしくなった」

キリアが例の十連撃の件を掻い摘んで話すと、笑顔だった少女の顔に段々と苦渋の色が広がります。眉を顰めてカイムの背で眠るガリーナを見遣り、小さな溜息を吐いた。

その様子に、キリアはふと思いついた事があった。

馬車に乗ったガリーナにミミが放った袋。あれは一体何だったのだろうか。少年の心中を読んだミミが、残念そうに頬を膨らませて応える。

「コイビトタケのコロンよ。幻覚効果まではいかずとも、それに近い効能があるって聞いたから期待してたんだけどね」

「それに近い効能……って」

名前の通りよ、と言って少女は鈴のような笑い声を上げた。

「媚薬よ、び・や・く。これを嗅ぐと傍に居る相手の事を好きになっちゃうって聞いたから折角取って置いたのに……つまらないの。」

王都の裏路地の占い婆さんから買ったの、結構高かったのに」

キリアはごくりと喉を鳴らした。冷や汗が首筋を伝う。

——この少女は。

「ちょっと効きすぎたみたいね、ガリ様には。仕方ない、別の作戦

を考えるわ。もうちょっと過激な方法にね。ああ、楽しくなってきた！ あたしこの村に来て正解よ、キリア君！」

（恐ろしい子……ッ！！）

青空に哄笑する怪馬の上の少女に、キリアはただ血の気を引かせて金縛りに遭ったかのように凝望する。

「コイビトタケだつて？」

ミミの朗らかな声を耳ざとく聞きつけたカイクが、途端に色を無くして背のガリーナと馬上の少女を交互に見た。

「そうか、道理でさっきから妙な香りが……ミミ、交代してくれ！ 彼女はまだコロンを持つてる」

「んん？」

子供達は振り返り、次にお互いの顔を見合わせる。ミミがにんまりと、悪知恵を思いついた悪童のような笑顔を作って首を振った。

「あたしのような脆弱ないち児童にはガリ様を支えて馬に乗る事なんてとても出来ません。逞しい殿方にお任せしますわ。ああ、それからあたしは十秒どころか一刻以上も異性に触れられていたなどと彼女に告げ口するほどいけない子でもないので、ご安心を。ちゃんと村まで送って差し上げてくださいね」

では後ほど、と頭を垂れたかと思うと、ミツフィーの腹を蹴る。

馬は彼女の悪魔のような所業に顔を青くしているキリアの襟元を咥え上げ、その情け無い絶叫と共に嵐の様に道を駆けていった。

「ま、待て！ 冗談じゃない、まずいつてば！」

突き放す事も服をまさぐる事も出来ず、カイクはひたすら慌てた。ぐっすりと眠っている少女は起きる気配は無く、そんな少女を背に負った青年はただ硬直し、そして春のうらかな風は能天気のにのんびりと頬を撫でる。

コロンを嗅がないように一度彼女を降ろそうとして、カイクは凍りついた。

すぐ近くにあるガリーナの顔、そこで閉ざされていたはずの双眸が静かに開いたのだ。

少女は黙ったまま、じつと鮮やかな翠色の瞳でカイムの横顔を見つめてくる。耳元を感じる小さな息遣いから逃れようと、あらぬ方に視線を飛ばす。

「あ、いやその……」

彼は頬を引き攣らせて愛想笑いをした。他にどうしろと言うのだ、と誰に言うでもなく胸中で絶叫する。そんな彼の心を知ってか知らずか、ガリーナは小さく息を吸い込んで、明瞭な声で言った。

「ちようちょ」

「へ」

——まだ幻覚効果から覚めていなかった彼女の至近距離からの十連撃は、確実にカイムを冥府の曲がり角近くまで追いやった。

+

小さな村の、小さな事件。

この日を境に税率は一割近くも下がり、領主の評判はいやに上がった。それに加えて寝惚けているガリーナを老馬で連れ帰った青年が頭から大量の血を流して行き倒れた以外は、特にどうという事も無い一日であった。

そして、村一番の馬鹿と名高い聖女とこの謎めいた元料理長が後々色々な事件を巻き起こすのだが、それはまた別の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1749b/>

微瞑むように 【第一話 聖女と最後の料理長】

2010年10月8日14時53分発行